# 守護人たちへ

桜井　鈴華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
守護人たちへ

【Ｎコード】
Ｎ５８４３Ｗ

【作者名】
桜井　鈴華

【あらすじ】
日本で暮らしているある兄弟と妹が
異世界にきて世界の守護神として生活するお話です。
最初は悩んだり失敗をしたり喧嘩をしてその中で多くの出会い、別れを経験し人との繋がりを実感していきます。
精神的にも肉体的にもだんだんと成長していった先に兄弟と妹はどの様な未来を選択するのかを描けたらと思います。

## 第一話「日常」がなくなる時（前書き）

気にしすぎかもしれませんが、文章中にパロディな文章が少し出ていたりします。

## 第一話「日常」がなくなる時

俺は良く同じ夢を観る。
何度も何度も。

そこはモノクロの世界。
美しい女と子どもが花畑に居る。
子どもがはしゃいでいる。

女が笑う。
子どもが笑う。
ふと目に入る木の上の林檎。
子どもがあれが欲しいと駄々をこねる。
女は困ったような笑顔で羽を使い林檎を?ぐ。

ふと少年が空を見上げる。
鳥が近づいているのに気が付く。
よく見るとあれは鳥であって鳥ではない。
世界はモノクロなのにその鳥だけに色がついている。
鳥が子どもめがけて飛んでいく。
このままではぶつかるのではないかと思う。
いや、ぶつけようとしているようだ。
女がものすごい速さで子どもの前に庇うように子どもを抱える。
女の体から血が飛び散る。
女が倒れ。
それでも笑顔で。
子どもが泣き叫ぶ。
「ごめんなさい、ごめんなさい……僕……僕……」

まったく俺とは関係ないはずなのに、心が震えて。
なぜだかいつも息が詰まる……。
我が儘を言ってはいけない想い。
大切な人を守るために。
あのようにはなって欲しくない。
「どうか……どうか！目を開けてください！……さま！」
「うあぁぁアァァァ！！！」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
けたたましくなる目覚まし時計の音。
「っ……またあの夢か」
朝６時、布団から起き上がる。

世の学生人、社会人が起きる時間としては少し早いだろう。
俺が２０歳までは祖父である銀郎じいさんに衣食住の世話をしてもらっていたが
祖父が亡くなり、可愛い弟と妹の為に辰巳（たつみ）家長男として家族の家事担当をそれから続けている。

最初は戸惑ったけど意外と出来るもんだな。
身支度をして慣れた手つきで朝食、弁当を用意、その後洗濯物を干していると
弟が起きてきた。

「はよー、兄貴」
「おはよー勇次」
「……おいおいなんだよそのエプロン……」
兄貴、やってもらっておいてなんだけど段々おかんみたいになり

つつあるな……」
「……ほっといて」

こいつは俺の弟。
コックを目指しており、現在調理師専門学校で勉強中。
「あー勇次悪いんだけどさ、有希起こしてやってよ」
「はぁ……めんどくせーなー」
有希とは俺の妹。
現在女子高生で１７歳。
最近、彼氏が出来たらしく家に帰ってくるのも遅い。
そのせいで寝不足気味らしくて、朝なかなか起きてこないんだよ。
はぁ……有希のお付き合いには文句を言いたくないけど、寝不足はやめてほしいよ。

「もう！！……ノックしてってば！」
「いちいちうるせーなー……早く起きろよ！」
ほらまた始まった。
兄弟仲がいいはずなんだけど、喧嘩も多い。
洗濯物を干し終わったので
仲良く喧嘩しながら2階の有希の部屋から降りていく2人に近寄り声をかける。

「はいはい、朝ごはん食べないと間に合わないよー」
「もー、信兄ももう少し早く起こしてよね！」
「寝坊したのは有希だろが！」
「勇兄はうるさいな！」
「まぁまぁ、有希ごめんな？とりあえず早く食べて」
俺がいつもの様に有希の頭をなでながらなだめる。
有希は顔を真っ赤にしてぶつぶつ言っている。
ついつい子ども扱いしてしまった、俺の悪い癖だ。

この歳の女の子は子ども扱いするとキレたりするから。

「「いってきまーす！」」

「はいよー！いってらっしゃーい！」

これが俺の日常。

俺はどうするんだって？

俺は体育大学を卒業し現在教育職員免許の勉強中。

ご飯をどんぶり飯をかっ込むように食べて済ませた後、片付けをして自分の部屋に向かう。

勉強に取り掛かろうとした時にふと家族の写真に目が行った。

俺と勇次、有希、銀じいでとった最後の写真だ。

銀じい天国でも元気にやっているかな……。

ぼんやり考えながら自分の首にかかっているクリスタルのペンダントをいじる。

このペンダントは銀じいに大学合格のプレゼントとしてもらったものだ。

少し荒目の銀の鎖のネックレスで普段の銀じいの服装からするとそぐわない位センスがいい。

銀じいは大切な知人からのプレゼントだったといっていたけどな。

そんな大切なものをもらえないと怒るとさびしそうな顔で

「そのペンダントは使われていた方が幸せじゃよ」

と言っていたので、ありがたくもらうことにした。

ぼんやりと考えながらも勉強に意識を集中する。

2時間ぐらい経ったかな。

おもむろに時計を見ながら一人つぶやく。

「そろそろ休憩にしよう」

台所に向かいポットから湯を注ぎ紅茶を入れる。

紅茶を飲みながらの休憩時間。

至福のひと時だなぁ……。

本を開く。
俺の趣味のひとつである読書で精神的な疲れを癒す。
最近読んでる本は「シャルロット・ホールドの事件簿」
第５短編集となっており、お嬢様探偵であるシャルロットが助手のワトルトと共に
数多くの難問を乗り越え、爽快に事件を解決していくミステリー小説で結構お気に入り。
シャルロットが犯人を突き止め、真相に近づいたさなか迫りくる危険に立ち向かうが
抵抗空しく、犯人に捕らえられてしまった。
そこまで読み終わったところで急に眠気が襲い、俺の意識は遠のいていった。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
白い雲と見渡す限りの闇に包まれ、自分が寝てしまった事を悟った。
「久しぶりじゃな、元気にしておったか？」
「?！銀じぃ……なのか？」
見間違えるはずもない。
伊達に２０年の付き合いではない。
そこにはグレイスヘヤーでキリリとした眉、歳の感じさせない真っ直ぐとした背中に、長年剣道をやっているせいか一瞬も隙がない気配を身に纏った俺たち兄弟の育ての親である「辰巳　銀郎」が居た。
「これは儂の作りだした幻想空間じゃ、精神体である儂の話を聞いてもらうために信也には眠ってもらった」
「じいさんその……死んだのは2年前だし四十九日はとっくに終わってるはずだから天国にとっくに行ってるかと思ったんだけど……」

「それはともかく、どんな形であっても会えて嬉しいよ……銀じい」
銀じいは嬉しかったのか照れたような、困ったような顔を浮かべている。
「ウオッホン、なんだなんだ長男の癖に女々しいのう。まぁしかし嬉しい事を言ってくれるもんじゃの」
「積もる話も沢山あるけど……何か今日は訳が有ってこうして会いに来てくれたのか？」
「おっとそうじゃった、儂がここに現れたのは実はお前たちにずっと内緒にしていたことを話そうと思ってじゃな……」
「内緒？」
「そうじゃ、まずは儂の事から話さなければならない」
「あぁ」
「先ほど、温かい歓迎をしてくれた後でその……いいづらい事なんじゃが」
「？」
「実は……儂は死んでないじゃよ……」
「え……それはどういう……」
「言葉通りじゃ」
「……」

「驚いて言葉も出ないようじゃな、話を続けるぞ」
驚いて言葉も出ない俺に落ち着かせるように銀じいはゆっくりと順を追って説明してくれた。
要訳すると
・銀じいは実は人間ではなく精神族と呼ばれる者でそもそも地球人ではない事。
・俺たち兄弟も地球人ではなくパラレルワールド……つまり異世界に住んでいる者という事。
・俺たちの父さんと母さんは守護人と呼ばれる存在で異世界を守る

役割を持つ事。
・守護人はその立場ゆえに、赤子を異世界で育てるとなると命を狙われる危険もあったため
代々赤子は環境の良い国の地球で育てる決まりになっている為ここで育てられた事。
・銀じいは元は俺の父親の元専属御使いであり、子を育てる教育係としての任務を全うすべくこの地球に赤子を3人も抱えながら来た事。
　等を異世界や種族に違い等についての説明を織り交ぜながら教えてくれた。
「……」
「相当混乱してるようじゃが話を続けるぞ」
「なぜ今このような話をするかというとじゃな、お前さん達両親と今までは2年ごとに連絡を取ってたんじゃが今回連絡をしようとした所どうも連絡が途絶えてしまっての」
「父さんと母さんからのか？！」
「そうじゃ」
「そこで、儂からのお願いがあっての……、お前たち3人で異世界に赴き父様母様の様子を探ってきてほしいんじゃ」
「お前たちはしきたりとして１６～２５歳の間に修行を積み一人前の守護人にならなくてはならない」
「以前は父様母様の意向で地球人としての暮らしを続けていてほしかったんじゃが……」
「最悪、現在の異世界において守護人がなんらかの影響で役割が出来ていない可能性もありうる」
「儂はお前たちが地球に戻ることも可能なように、またその間の時間を場合によっては凍結維持をしなくてはならない」
「準備などもあるじゃて、一週間の猶予をやろう」
「この任務は命に係わる可能性が高い。最悪異世界から地球に戻れないという可能性もある……その間にお前たちはどうしたいか決め

てほしいのじゃよ」
「え……はぁ……うーん……」
正直、色んな情報が詰め込まれすぎて処理しきれない事の方が多い。
そもそも、自分たちがまさか地球人ではないという発想も思春期の男でもない限り生まれないだろうな……。
整理したいのと、自分の中でなかった事にしたいというのが本音だけどな。
しかし、銀じいがいるのは間違いがないと言い切れる。
とりあえず、あいつらに相談するべきなんだろう……。
色々と考えていたのが顔に出ていたのか今度は少し悲しそうな顔をして
「じゃあ、言いたいことは伝えたから詳しい事はお前の机の上に巻物を置いておくぞ」
「また……な、銀じい」
「あいわかった」
そして意識が遠のいていく……。
これは俺たちの日常がなくなっていった始まり。

## 第一話「日常」がなくなる時（後書き）

二か月ほどかけて考えた設定をやっと活用する時が来ました。
カッコいい男の人とかをどうしても出したいと思っているので登場人物が多い割に
男率が高いかもしれません。
これでも修正は何度かやっているんですが、いかんせん文章能力が低いので文章がおかしいところがございましたらご指摘いただけると嬉しいです。
もちろん、感想もお待ちしてますー！！

## 第二話　長男の気持ち（前書き）

あ、毎度見てくださっている方はお気づきかもしれませんが表現がおかしいなーって思う所はちょこちょこ変えてしまってます。

## 第二話　長男の気持ち

その日の夜の事。
「集まってもらってごめんな……」
「兄貴、気にすんなって」
「せっかく恵美と約束してたのにー！早くお風呂にも入りたいし……あいたっ」
俺が注意するよりも先に勇次が有希に叱っていた。
「いちいちうるせぇんだよ！とっとと座れよ！」
「あ、あはは……まぁまぁ」
集まるまで一悶着あったけど、俺の必死の説得が聞いたのか勇次、有希に何とか集まってもらうことが出来た。
そこで銀じいにもらった（あの後目が覚めたら机の上に置いてあった）巻物を広げて
２人にかいつまんで説明する。
２人とも予想通りあまりいい顔はしてくれなかった。
「銀じいの気持ちも分からないではないけど……俺は夢をあきらめるわけにいかないんだよ！」
「私だって……やりたい事とかいっぱいあるし……！」
「……うん……俺だってバイト念のため辞めておかないといけない……銀じいは時間を止めておくとは言ってくれたけど教員試験もあるしな……」
「……」
皆地球での生活が当たり前すぎてそんな事考えられないといった感じだった。
過去や先祖がどうあれ俺達は今を生きている。
俺は体育の教師、勇次はコックになりたい。
有希だって彼氏が出来たばかりみたいだし。
「みんなの意見は分かった」

「俺も思っていたことだし、もちろん……母さんや父さんが死んだわけじゃないと聞いてうれしかったし、連絡が出来ないっていうことはもしかしたらっていう気持ちで気にならないのは嘘なんだけど……」
「兄貴……」
「信兄……」
「その……異世界に行ったとして、万が一こっちに戻れなかったとしたら悔やみきれない。勿論、お前たちが行ってもいいって気持ちなら考えたんだけどな……行きたいって気持ちもあるけど、周りの人の事を考えると……考えられないっていうか」
なんだか、言い訳じみてカッコが悪い。
でも、家族に嘘言ってもしかたないしな。
とりあえず、一週間皆で考えて……今のところは銀じいには悪いけど断ろうという話になり
お開きとなった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

次の日の朝
いつもの様に朝ごはんを作り、テーブルに並べる
お弁当も作った。
洗濯物を干している最中に勇次から声がかけられる、心なしか元気がなさそうだな。
「兄貴、はよ」
「おう、おはよー」
「勇次悪いけどいつもの様にっと……あはは……有希おはよ」
「おはよーあっ寝坊してると思ったんでしょ……信兄ひどいなぁ」
「お前がいつも寝坊してるからだろが」
「勇兄はだまって！」
いつもの様に有希を起こしてもらおうとしたら後ろからパタパタ

と階段を下りる音がして有希が不機嫌そうに挨拶を交わす。
有希には悪いけど、勇次の言っている事が正しいなぁと思った。
いつもの様に兄弟を学校に送り、カレンダーを見る。
明日はどうやらバイトの日だ。
銀じいが亡くなった後一年は銀じいの遺産を崩したりして何とかしていたが
後々どうなるかわからないので自分たちで決めてそのお金で暮らしていこうと決めていた。
勿論銀じいの遺産はたくさんあるし、自分たちで稼がなくても後２０年は暮らしていけると思う。

それでも甘えてはいけないと思っていた。
これからは自分たちで生きていかないといけないと感じていた。
まわりの大人は甘えてくれ、頼ってくれと言ってくれた。
嬉しかったけど。
俺は昔から”お金の切れ目は縁の切れ目”という事を知っていた。
銀じいは昔から剣道が得意で剣道会の有数の人物であった。
剣道は3段から人に教える事の出来る権限を持つが
銀じいは7段であった。
他の銀じいの弟子に聞いた話だと2段までならそれなりの腕があれば学生でもとれるらしい。
しかし7段となると日々の努力は勿論の事、永延と繰り返される吐くような訓練。
それに耐えうる精神、体力を持つ人格者ではないと到底出来ないのだそうだ。
その銀じいは昔は道場を開き多くの弟子を持っていたが
ある弟子が金関係で膨大な借金を追ってしまい、逃げるように辞め
弟子からお金を吸い取れないと知ったチンピラどもが道場に押し寄せ多くの弟子がけがをする大惨事になったらしい。
幸いにも再起不能な弟子は出なかったようだが、そんな事があっ

てやむおえず道場をたたまないと行けなくなり、週に何度か学校の運動場を借りて教える程度しか出来なくなったんだそうだ。
それ以降、辞めた弟子とは疎縁となり、他の弟子もあいつとは会いたくないといっているそうだ。
その話を聞いて幼心にも悲しみを覚え
お金の怖さを実感した。
それ以来、お金に関してはたとえ兄弟や友達にも厳しく接してきたし、兄弟も俺を見てお金に対する考えは厳しくなったように思う。

高校生になって自分でバイトをやってお金を稼ぐことが出来るのが嬉しかった。
銀じいは俺たちがお金の事が厳しい理由は何となくわかっていたらしくて
小さい頃は良く「今お金が稼げないお前たちは色々な事を学ぶのが仕事で、儂はそれに対する報酬をやっているだけじゃ」
と言ってくれていた。
以前はそれでも納得がいかず、甘えてくれない俺に対して「意地っ張りじゃ！」と軽く怒られてしまう程だったけど。
高校生になってバイトを始めてからは俺も子どもなりの割り切りが出来るようになって
自然と銀じいに甘える事が出来るようになった。
バイトも色んな事を経験したくてそれこそ新聞配達のバイトからファミレス、清掃、テレアポなど等
数えきれないくらい経験した。
おかげで大学生になってからは良く落ち着いてるとか頼りがいがあるとか言って
男の後輩に頼られたり、友人からは相談に乗ることも多かった。
なぜか友人の彼女の尻拭いもしたりした。
当然、女の嫌な部分とかも見る羽目になって行為を持たれたりすると無意識にさけたりめんどくさいと思う様になってしまった。

話が逸れた。
明日は本屋のバイトの様だけど、正直今日の段階で2択迷っており携帯をいじっている状態だ。
1つは一旦バイトに向かい、バイトの先輩に相談してみる。
もう1つは今日の段階でバイトの先輩に相談し、そのまま場合によっては辞める手続きを行うだ。
「うーーん……どうするかなぁ」
今のバイトの先輩は「荒木　僧史郎」という名前で俺の5歳年上。2年前に当時勤めていた会社でリストラに遭い、泣く泣くこの本屋の社員として就職した経歴の持ち主である。
正社員なのに偉ぶるところがなく、面倒見がいい人で店長からも信頼されている。
そして、俺とは気が合うらしく良く飲みに行ったり俺の兄弟の世話もしてくれたりと家族ぐるみでお世話になっている人だ。
たしか今日は先輩も休みだったよなぁ……。
正社員と言えどもサービス業の会社は誰もがシフト制の会社が多く休みが平日の場合が多い。
先輩もそれは入った時からわかっていたそうだが、なかなか同級生と休みが合わず寂しいらしい。
なので俺が飲みやら遊びに誘うと大抵が暇で嬉しそうに付き合ってくれるのだ。
俺は先輩が迷惑ならないよう時間を調整し、電話を掛けた。

「おー……おはよー……」
眠そうな先輩の声。
「……あ、おはようございます。すいません起こしちゃいましたか？」
「あーいやいや、ちょうど起きようと思ってた所だったから」
「あはは、それなら良かった、先輩って今日空いてますか？」
「おうよ！どっか遊びに行くかい？！」

「あー……えっと遊びも捨てがたいんですけど、ちょっと相談したい事があって」
「……ん？なんか悩みかい？相談にのるよ？」
「いつもありがとうございます！えっと、ゆっくり話したいので家に呼びたいんですけど……」
「おーいいよーじゃあなんかつまむもの買ってそっち行くよ」
「分かりました、では1時間後にお待ちしてます、よろしくお願いします」
電話をゆっくり切る。
先輩に失礼にならないよう簡単に掃除が終わった頃チャイムが鳴った。
「おー、来てくれてありがとうございます」
「いいって、俺とお前の仲じゃないか！気にするなよー」
いつもの人懐こい笑顔をみてほっとする。
なんでこんなに人が好くて仕事の出来る人をリストラなんかしたんだろう。
その会社の社長を殴ってやりたいくらいだ。
ぼんやり考えながらテーブルに案内する。
先輩の持ってきてくれたクッキーとそれに合わせた紅茶を注ぎ向き合う形で座った。
「それで話って？」
先輩に銀じいの昨日聞いた話をこと細かく話す。
最初は流石にビックリした様子で聞いていたが俺の真剣な様子に冗談ではないと感じたんだろう。
最終的にはこれまでにないくらい真剣に話を聞いてくれた。
聞き終わった後、先輩はしばらく悩んで意を決したように口を開いた。
「……で信也はどうしたい」
「……それを決めかねてるから相談したんですよ……自分でも頭いっぱいで……」

「俺は信也はどうしたいか聞いたんだよ」
「っだから……！」
先輩の顔を見てはっとした。
先輩が泣いている、多分先輩自身気が付いていないのだろう目を真っ直ぐ俺に向けて目じりからまるでぼたぼたと水が落ちている様だった。
「俺は正直信也と知り合ってそんなに立っていないし、俺がどうこう言う筋合いは無いのかもしれない。だけどな知り合った当初から信也は誰かに頼るのが苦手だったよな」
「それは……」
「んー頼るのが苦手とは違うのかもな、お前は優しすぎるんだよ」
「そんなことな……」
「いやいや……最初は大人の付き合いで割り切ってそういう風に接してるのかと思ってたんだよ」
「だけど、兄弟に接しているお前も同じ態度で接しているのも見て、誰にでも同じ様な態度のお前を俺がひっぱってやらないとと思ってさ、でも知らず知らず俺もお前に頼ってたのかもしれないな……」
先輩の言葉を聞いて俺も泣いている事に気が付く。
「もう1度聞く、お前はどうしたい？」
「俺は……っ俺は本当はここじゃなくて向こうに行ってみたい……です。向こうで父さん、母さんに会ってみたいし、たとえ会えなくてもどういう生活をしていたとかどんな気持ちだったかとか感じたい」
「ずっと苦しかったんです、まわりが当たり前に両親が居て俺達も銀じいは居たけど、父さん、母さんってのが居なくて……今の知り合いともう会えなくなるかもしれないと思うと辛いです……でも自分の両親と会えなくなるかもしれないと思うと一生後悔すると思うんです。先輩から見たら俺の意見って冷たいと思うかもしれないけど……っ涙とまんねぇ……」
「ううん、優しい後輩のお前だからこそきっとそういう選択をする

と思ったよ」
「むしろ、違う選択をしてたら殴ってたかもしれないなーあはは……まぁ……もしかしたら会えなくなるかも知れないけど、また会えるかもしれないんだろ？そうしたら色々聞かしてよ、な？」
胸が苦しい……先輩は俺の話しぶりから本当は行きたがっているのを見抜いていたのかもしれない。
頭をがっしがしなでられた。
その後家にあった人生ゲームをしながら沢山話をした。ずっと先輩は笑顔で明るく話をしてくれた。
途中で勇次と有希が帰ってきて人生ゲームをやり直し遅くなったと言って夕飯はあるもので先輩が作ってくれた。
結局料理はそんなに得意じゃないからと照れ臭そうに笑い鍋を食べてお開きなった。
先輩は明日出勤で俺の事は店長に話を付けて辞めさせてくれるって悲しそうに笑ってくれた。

明日から他の人にも連絡しないとな。
その前に弟と妹にも説得しないと……。
俺の胸には少しの悲しさとそれ以上の嬉しい気持ちで溢れていた。

## 第二話　長男の気持ち（後書き）

読んでくださり、ありがとうございます。
しばらくは辰巳兄弟たちの葛藤を書こうと思ってます。
それと異世界に兄弟が行こうとする動機をうまく表現できたらいいなと思ってます。
今は主人公視点で物語が進んでますが、度々次男と長女に視点が変更する場合があります。

## 第二・五話　私の場合（前書き）

割とサバサバした性格の妹有希視点です。
主人公と時間枠が被るので、面倒な人は飛ばしてください。

## 第二・五話　私の場合

いつもの様な毎日。

尊敬する兄が2人居て死んじゃったけど大好きだった銀じいちゃんも居て

大好きな友達と大好きな彼氏と……。

幸せだった。

そんな私のささやかで他の人から見たら贅沢すぎる幸せを潰される日が来るなんて思いもよらなかった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーー

普段は口が悪くていつもぶっきらぼうだけど、頼りがいがあって私がつらい時にははっとするアドバイスをくれる勇兄と、いつも笑顔でとっても優しくて大人顔負けのしっかり者で運動神経も抜群の信兄。

妹の私が言うのもあれだけど、二人ともかっこよくて私が妹じゃなかったら惚れてたくらい。

勿論、友達にもいった事ないし絶対に誰かにその事を口に出した事は無い。

そんな事言った日には勇兄は調子乗るし、信兄には何かあったんじゃないかって心配されるに決まってる。

何より恥ずかしい。

朝ご飯とかお弁当はいつも信兄のお手製。

コック目指してるんだから勇兄がすればいいじゃんって言ったら

「勇次はその分勉強してほしいからさー」

って笑いながら言う信兄と

「自分の作った弁当より兄貴に作ってくれた方が嬉しいんだよっ」

って照れくさそうに言う勇兄の声が被って笑っちゃった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーー

いつもの様に友達の恵美と亜紀に挨拶をして、3人一緒に学校に向かう。

恵美は私が小学生の時からの友達で元々銀じいの弟子の子どもだったから幼馴染みたいなもの。

最初は人見知りが激しくて中々友達になってくれなかったけど。

小学校入ったばっかりの頃から信兄と勇兄は人気で、一番下で妹だった私が一番話しやすかったんだろう。

良く上級生の男女関わらず言付けやら手紙やらプレゼントをお願いされて。

大変だったなー今はそれぞれ違う学校って言う事もあるし、それなりにあしらい方も兄たちは分かってきたみたいだけど。

当時は兄たちも分かってなかったし、私も断り方が上手くなかったから一方的に渡されて。

結構恨まれたり兄たち妹ってだけでお近づきになろうとする人もいたけど、恵美が結構庇ってくれたりしたので言葉に表せない位感謝してる。

原因はこんな事考えたくないけど、兄たちからというのは思ってて。

でも兄たちはただ生活をしているだけだ、生活をするために勉強をして、勉強をするために学校に来ている。

それは皆と変わらないはずなのに、どうして心穏やかに生活をさせてくれないんだろう。

当時は良くそういう風に考えて心がささくれだらけになったりしたけど。

それを抜けられてうまく過ごせる様になったのは彼女のおかげもあると思う。

亜紀は知り合ったのは中学3年からだったんだけど

損得無しの付き合いと言うかさばさばしてて話しやすくて面白い

子。
　自然と私も恵美も仲良くなって、気がついたら3人で遊んでばっかりなんだ。
「にしてもさーお兄ちゃんっ子のあんたが彼氏とはねー」
　ここ最近出来た彼氏の漢太の事をからかってくる。恥ずかしくてなんだかくすぐったいけど悪い気はしない、なんとなく勇兄と同じようにずけずけとものを言う所は勘違いされやすいけど優しさが見え隠れしていて私は大好き。
「本当にねー、私もその恩恵にあずかっていい男の1人は2人……私の好みはねー優しくてかっこよくてー金持ちよ！」と夢見がちに冗談きついしゃれをさらっと口にする亜紀。
「もー何いってんのー恵美もひどいけどぉ……亜紀は2人って……しかも金持ちって……」
「「「あはははは！！」」」
　3人で笑い合う、多分男の子が居たら真っ青になっちゃうくらいの冗談。
　女の子同志だから出来る話題だよね。
「やっほー、お嬢様方～俺とお茶しない～」
　そんな周りから見ると良くわからない微妙な空気をぶった切ってくれた男の子。
　少しくせっ毛で色素が薄目の優しい笑顔がそこにあった。
「あー有希の王子様のお出ましよ～」
「噂をすれば何とやらってね！」
　もう何度目か分からない二人のからかい。
「おっと俺の噂か～！いやーまいったな、しかし俺には有希姫という……」
「あーもう！漢太も乗らなくていいから！！行くよ！！」
　漢太はノリノリで話してたけど、もう恥ずかしくて聞いてられないったら！
「「はいはい、ご馳走様！またねー」」

「おーみんなまたなー？」

と、私に引っ張られながら何も感じていないように手を振り別れる彼氏と友達

友達公認ってありがたいけど疲れる……。

この男の子は私の彼氏の「大泉　漢太」

元々は勇兄の後輩で私の先輩。

勇兄とは物凄い仲良くて、勇兄の口の悪さをのらりくらりとかわしボケるすごい人。

空気読むのがうまいんだと思う。

多分、あの毒舌勇兄がクラスメイトに〟可愛い勇次〟で済まされてるのっていつも漢太が隣に居てつかめない会話にぐったりしているおかげもあると思うんだよね……。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

放課後、水泳部の活動が有り部活動を済ませた後、部室に行くと部長の「蒼凪　千昌」さんと出会う。

「お疲れー」

「あ、お疲れ様です千昌部長」

今からプールに入るんだろうか。

白く透き通るような肌に瞳の奥がキラキラと瞬くキリリと凛々しい眉に少しきつめの目の形が女性らしさとは別のカッコいい男の子を連想させる。

大会にも良く出場していて、今年期待の選手と取材も来るほど。

一部のファンからは水泳界の男装の麗人とまで言われているみたい。

「もー堅ぃ～千昌で良いって言ったじゃん～敬語も使ってるしー……」

「あ……うーんでも一応部長じゃないですか……」

「一応って何よー一応って！」

「あすいませ……」

「あっはは！冗談よ、最近有希ちゃん頑張ってるね？」
「ほんとですか？！ありがとうございます！」
「うんうん、いいこいいこ、明日も頑張ろうね～」
「はいっお疲れ様ですっ」
やっぱい、かっこいいな……女なのに。しかもちょっと性格変だけどイケメンなのっ
惜しむべきは女性だった事よね。
ぼんやり考えながら更衣室で手早く着替える。
最初は恥ずかしいーとか考えてたけど着替えに慣れてくると何でもない。
競泳水着が濡れてピチピチした部分を手早くタオルで拭いて
上からそのままスカートとブラジャーをつける。
ブラジャーの下から上の肩掛けの部分を外し胸が見えないように下におろす。
そのままキャミとブラウスを着てボタン着けて上着完了。
下ろした水着をスカートの上から外してパンツ履いて靴下を履けば下も完了ーっと。
1分もかからず手早く着替える。
髪の毛は濡れたポニーテールのままで肩にタオルかけて乾かしながら漢太との待ち合わせ場所に向かう。
いきなりチョップされた、ん？なんか漢太が珍しく怒ってる。
「有希ちゃん！ちゃんと髪の毛乾かしてからきなって！風邪引いたらどうすんのー！それと、また携帯確認してなかったでしょ……勇次お兄さんと恵美ちゃんから有希ちゃんから連絡来ないって電話来たよ！ちゃんと今直ぐ連絡しとけよー？」
「はい……ごめんなさい」
わしゃわしゃと自分の髪を乾かしながらまずは勇兄に連絡。最初に聞いた言葉が
「っおっせえんだよ！何回電話したと思ってんだ！」
悪いのはこっちだけどさー、言い方ってもんがあるでしょーまあ

勇兄らしいけど。
「水泳部だったの！それで何ー？」
「あー、それは悪かった。えーっと兄貴から大事な話があるんだってよ」
「ふーん、信兄から？なんか珍しいね？」
「俺もわかんねぇ、夜６時に居間に集合な？じゃあ伝えたから」
言うだけ言ってブチっと電話が切れる。
まぁ、謝ってくれたしいいか。
恵美からの連絡はメールにも入っていて５時からカラオケのお誘いだった。
確実に信兄との話と被りそうだったのでメールで断っておいた。
私が一通り連絡し終わったのを見計らって横から漢太が間に合わないといけないから早く帰ろうと言ってくれた。
うーん漢太は出来る彼氏だな！とニヤニヤしながら思ったのはないしょ。

――――――――――――――――――――――――

その日の夜の事。
「集まってもらってごめんな……」
「兄貴、気にすんなって」
「せっかく恵美と約束してたのにー！早くお風呂にも入りたいし……あいたっ」
きっと明るい話だと思ってたのに……重い空気が耐え切れなくて思わず軽口を叩く。
「いちいちうるせぇんだよ！とっとと座れよ！」
重い空気を読んだのだろうな～勇兄がいつも以上にイライラしてた。
「あ、あはは……まぁまぁ」
私もついつい勇兄の態度にイライラしてしまい、危うく喧嘩になる所だったけど信兄の必死の説得によりお互いのイライラが収まる。

そこで見覚えの無い巻物を自分の部屋から信兄が持ってきて広げて見せてくれた。
そこには見たこともない曲線と丸が重なった様な字のタイトルで始まり、その後は日本語で私の想像を絶する事が描かれていた。
――――――――――――――――――――――――――
いやいや、冗談でしょ？
っていうか、冗談であって欲しかった。
今までの幸せが日々が音を立てて崩れていくみたいだった。
「銀じいの気持ちも分からないではないけど……俺は夢をあきらめるわけにいかないんだよ！」
さすがに勇兄も黙っていられなかったんだろうな。怒りで震えてるのが分かった。
「私だって……やりたい事とかいっぱいあるし……！」
私も負けじと精一杯自分の意見を主張してみる。
「……うん……俺だってバイト念のため辞めておかないといけない……銀じいは時間を止めておくとは言ってくれたけど教員試験もあるしな……」
「……」
皆地球での生活が当たり前すぎてそんな事考えられないといった感じだった。
過去や先祖がどうあれ俺達は今を生きている。
信兄は体育の教師、勇兄はコックになりたい。
私だって今の幸せを壊したくないよ。
「みんなの意見は分かった」
「俺も思っていたことだし、もちろん……母さんや父さんが死んだわけじゃないと聞いてうれしかったし、連絡が出来ないっていうことはもしかしたらっていう気持ちで気にならないのは嘘なんだけど……」
「兄貴……」

「信兄……」
「その……異世界に行ったとして、万が一こっちに戻れなかったとしたら悔やみきれない。勿論、お前たちが行ってもいいって気持ちなら考えたんだけどな……」
珍しく信兄が言いよどんでる。
きっと本気で迷っているんだ。
その様子が勇兄にも伝わったんだろう、凄く泣きそうな顔に一瞬だけなった。
とりあえず、一週間皆で考えて……今のところは銀じいには悪いけど断ろうという話になり
お開きとなった。
――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――
あの後部屋に戻ってずっと考えてた。
考えれば考えるほど深みに嵌って行く自分がいた。
きっと信兄は本当は行きたいんだ。
それを迷わせているのは勇兄と私が反対したからに決まっている。
それでも私は友達と会えないのは辛い。
神様は本当はいないのかな？
私が贅沢すぎる環境だからなの？
教えてよ神様……。
一人シーツを噛んでメソメソしているとドアからコンコンと聞こえた。
「有希？起きてるか……？」
いつになく優しげな勇兄の声。
ごしごしと泣き跡を消して深呼吸をする。
「ん……何？今から寝ようと思ってたとこだよ？」
ゆっくりとドアを開ける、どうせ分かってて聞いてるんだろうから素直に認めてもいいんだけど、なんとなく照れくさかった。
「あー悪いなぁ、ちょっと俺眠れなくてさぁ……ホットチョコ作り

すぎちゃったんだよ」
勇兄は私が泣いているのをきづかないふりを装い、顔も見ずに私の部屋のベランダに向かう。
私も受け取ったホットチョコを零さない様気をつけながらベランダに出た。
まだ乾ききってない涙跡に風がなでて泣きすぎて火照った頬にひんやりと心地よく感じた。
ホットチョコも冷えて凍えそうな心と体に染み渡っていく。
「なぁ有希、お前はさ……兄貴の事好きか？」
「ブッ！ケホッケホ……い、いきなりどうしたのさ勇兄？」
「あーっきったねえなあ……なんていうかさ、昔っから兄貴って自分より他人の事ばっかりで頼ってくれない所があるじゃんか」
「あー分かるかも」
「だろ？だから昔さ凄く信用していない時期が有ったんだよ」
「へー？今の勇兄からは想像つかないや」
「あっはは！そうかもしんねえなぁ……でもある日を境に考え方を変えたんだよなー」
「ある日？それは？」
「まぁ細かい事は気にすんな、それで、その考えって言うのは兄貴がオブラートに包む分俺がはっきり言っちまえば楽になるんじゃねぇかなって」
私の兄ながらどきっとした。
月に照らされてぼんやりとした明かりの中その困ったような照れくさそうな笑顔をしながら語る勇兄。
悪いけど私はシスコンの趣味なんて無いのよっ！不意打ちすぎるから！
もーなんというかこんな事で一々同様してる自分が気持ち悪っ。
「兄貴もそうだけど、お前も性格が似ちまったよな？」
少しとがめる様な目で私をにらむ。
「兄貴に気を使うのも分かるけど、言いたいことはちゃんと言えっ

て」
「まぁそれはいいとして、だ」
急に顔が泣きそうな顔になる。
「今回の兄貴の話方は久々にイラっとした」
「言いたい事があるならはっきり言って欲しいよ」
「私も……少し思った」
「だろ？」
「うん、私も本当は兄たちの事尊敬してるし。家族だから」
「そうか」
「友達とか彼氏とか会えないの寂しいけど……兄たちが居ないのは考えられないから」
「それで？」
「兄たちが一人でも行くって言うんだったら絶対についていくと思うし」
「あぁ……」
「兄たちが居れば地球にたとえ離れてたとしても、万が一戻れなくても、時間かかるかもしれないけどいつか良い思い出って言える」
「あぁ……うん……」
勇兄は拙い私の話を私の頭を撫でながら優しく聞いてくれた。
これがあるから勇兄は嫌いになれない。むしろ好きだ。
それに普段口が悪いのは言いたい事を本音で言っているからだ。
裏を返せば嘘は絶対に言わないと思う。

気がついたら朝になってて、私は布団をかけて寝ていた。
多分勇兄がこっくりこっくりしだした私をあわててベットに移してくれたんだろうな。
朝の支度をし終わった頃に勇兄が起こしに来た。
睨みながら昨日の事を口止めされた。
以前こういう事をしてくれた時に信兄に言ったら結構本気でなぐられた事がある。

信兄は爆笑してたけど……。
なんだかもやもやとした物が無くなった気がした。
信兄には改めて自分の気持ちを伝えなきゃ。
友達にはいつもの2人と漢太には説明しておきたいかな……。

## 第二・五話　私の場合（後書き）

如何でしたでしょうか。
私も生物学上は女なので、女性ならではの視点で書かせていただきました。

## 第二話　長男の気持ち（前書き）

あ、毎度見てくださっている方はお気づきかもしれませんが表現がおかしいなーって思う所はちょこちょこ変えてしまってます。

## 第二話　長男の気持ち

その日の夜の事。
「集まってもらってごめんな……」
「兄貴、気にすんなって」
「せっかく恵美と約束してたのにー！早くお風呂にも入りたいし……あいたっ」
俺が注意するよりも先に勇次が有希に叱っていた。
「いちいちうるせぇんだよ！　とっとと座れよ！　」
「あ、あはは……まぁまぁ」
集まるまで一悶着あったけど、俺の必死の説得が聞いたのか勇次、有希に何とか集まってもらうことが出来た。
そこで銀じいにもらった（あの後目が覚めたら机の上に置いてあった）巻物を広げて
２人にかいつまんで説明する。
２人とも予想通りあまりいい顔はしてくれなかった。
「銀じいの気持ちも分からないではないけど……俺は夢をあきらめるわけにいかないんだよ！　」
「私だって……やりたい事とかいっぱいあるし……！　」
「……うん……俺だってバイト念のため辞めておかないといけない……銀じいは時間を止めておくとは言ってくれたけど教員試験もあるしな……」
「……」
皆地球での生活が当たり前すぎてそんな事考えられないといった感じだった。
過去や先祖がどうあれ俺達は今を生きている。
俺は体育の教師、勇次はコックになりたい。
有希だって彼氏が出来たばかりみたいだし。
「みんなの意見は分かった」

「俺も思っていたことだし、もちろん……母さんや父さんが死んだわけじゃないと聞いてうれしかったし、連絡が出来ないっていうことはもしかしたらっていう気持ちで気にならないのは嘘なんだけど……」
「兄貴……」
「信兄……」
「その……異世界に行ったとして、万が一こっちに戻れなかったとしたら悔やみきれない。勿論、お前たちが行ってもいいって気持ちなら考えたんだけどな……行きたいって気持ちもあるけど、周りの人の事を考えると……考えられないっていうか」
　なんだか、言い訳じみてカッコが悪い。
　でも、家族に嘘言ってもしかたないしな。
　とりあえず、一週間皆で考えて……今のところは銀じいには悪いけど断ろうという話になり
　お開きとなった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

　次の日の朝
　いつもの様に朝ごはんを作り、テーブルに並べる
　お弁当も作った。
　洗濯物を干している最中に勇次から声がかけられる、心なしか元気がなさそうだな。
「兄貴、はよ」
「おう、おはよー」
「勇次悪いけどいつもの様にっと……あはは……有希おはよ」
「おはよーあっ寝坊してると思ったんでしょ……信兄ひどいなぁ」
「お前がいつも寝坊してるからだろが」
「勇兄はだまって！」
　いつもの様に有希を起こしてもらおうとしたら後ろからパタパタ

と階段を下りる音がして有希が不機嫌そうに挨拶を交わす。
有希には悪いけど、勇次の言っている事が正しいなぁと思った。
いつもの様に兄弟を学校に送り、カレンダーを見る。
明日はどうやらバイトの日だ。
銀じいが亡くなった後一年は銀じいの遺産を崩したりして何とかしていたが
後々どうなるかわからないので自分たちで決めてそのお金で暮らしていこうと決めていた。
勿論銀じいの遺産はたくさんあるし、自分たちで稼がなくても後２０年は暮らしていけると思う。

それでも甘えてはいけないと思っていた。
これからは自分たちで生きていかないといけないと感じていた。
まわりの大人は甘えてくれ、頼ってくれと言ってくれた。
嬉しかったけど。
俺は昔から”お金の切れ目は縁の切れ目”という事を知っていた。
銀じいは昔から剣道が得意で剣道会の有数の人物であった。
剣道は3段から人に教える事の出来る権限を持つが
銀じいは7段であった。
他の銀じいの弟子に聞いた話だと2段までならそれなりの腕があれば学生でもとれるらしい。
しかし7段となると日々の努力は勿論の事、永延と繰り返される吐くような訓練。
それに耐えうる精神、体力を持つ人格者ではないと到底出来ないのだそうだ。
その銀じいは昔は道場を開き多くの弟子を持っていたが
ある弟子が金関係で膨大な借金を追ってしまい、逃げるように辞め
弟子からお金を吸い取れないと知ったチンピラどもが道場に押し寄せ多くの弟子がけがをする大惨事になったらしい。
幸いにも再起不能な弟子は出なかったようだが、そんな事があっ

てやむおえず道場をたたまないと行けなくなり、週に何度か学校の運動場を借りて教える程度しか出来なくなったんだそうだ。
それ以降、辞めた弟子とは疎縁となり、他の弟子もあいつとは会いたくないといっているそうだ。
その話を聞いて幼心にも悲しみを覚え
お金の怖さを実感した。
それ以来、お金に関してはたとえ兄弟や友達にも厳しく接してきたし、兄弟も俺を見てお金に対する考えは厳しくなったように思う。

高校生になって自分でバイトをやってお金を稼ぐことが出来るのが嬉しかった。
銀じいは俺たちがお金の事が厳しい理由は何となくわかっていたらしくて
小さい頃は良く「今お金が稼げないお前たちは色々な事を学ぶのが仕事で、儂はそれに対する報酬をやっているだけじゃ」
と言ってくれていた。
以前はそれでも納得がいかず、甘えてくれない俺に対して「意地っ張りじゃ！」と軽く怒られてしまう程だったけど。
高校生になってバイトを始めてからは俺も子どもなりの割り切りが出来るようになって
自然と銀じいに甘える事が出来るようになった。
バイトも色んな事を経験したくてそれこそ新聞配達のバイトからファミレス、清掃、テレアポなど等
数えきれないくらい経験した。
おかげで大学生になってからは良く落ち着いてるとか頼りがいがあるとか言って
男の後輩に頼られたり、友人からは相談に乗ることも多かった。
なぜか友人の彼女の尻拭いもしたりした。
当然、女の嫌な部分とかも見る羽目になって行為を持たれたりすると無意識にさけたりめんどくさいと思う様になってしまった。

話が逸れた。
明日は本屋のバイトの様だけど、正直今日の段階で2択迷っており携帯をいじっている状態だ。
1つは一旦バイトに向かい、バイトの先輩に相談してみる。
もう1つは今日の段階でバイトの先輩に相談し、そのまま場合によっては辞める手続きを行うだ。
「うーーん……どうするかなぁ」
今のバイトの先輩は「荒木　僧史郎」という名前で俺の5歳年上。2年前に当時勤めていた会社でリストラに遭い、泣く泣くこの本屋の社員として就職した経歴の持ち主である。
正社員なのに偉ぶるところがなく、面倒見がいい人で店長からも信頼されている。
そして、俺とは気が合うらしく良く飲みに行ったり俺の兄弟の世話もしてくれたりと家族ぐるみでお世話になっている人だ。
たしか今日は先輩も休みだったよなぁ……。
正社員と言えどもサービス業の会社は誰もがシフト制の会社が多く休みが平日の場合が多い。
先輩もそれは入った時からわかっていたそうだが、なかなか同級生と休みが合わず寂しいらしい。
なので俺が飲みやら遊びに誘うと大抵が暇で嬉しそうに付き合ってくれるのだ。
俺は先輩が迷惑ならないよう時間を調整し、電話を掛けた。

「おー……おはよー……」
眠そうな先輩の声。
「……あ、おはようございます。すいません起こしちゃいましたか？」
「あーいやいや、ちょうど起きようと思ってた所だったから」
「あはは、それなら良かった、先輩って今日空いてますか？　」
「おうよ！　どっか遊びに行くかい？！　」

「あー……えっと遊びも捨てがたいんですけど、ちょっと相談したい事があって」
「……ん？なんか悩みかい？相談にのるよ？　」
「いつもありがとうございます！　えっと、ゆっくり話したいので家に呼びたいんですけど……」
「おーいいよーじゃあなんかつまむもの買ってそっち行くよ」
「分かりました、では1時間後にお待ちしてます、よろしくお願いします」
電話をゆっくり切る。
先輩に失礼にならないよう簡単に掃除が終わった頃チャイムが鳴った。
「おー、来てくれてありがとうございます」
「いいって、俺とお前の仲じゃないか！気にするなよー」
いつもの人懐こい笑顔をみてほっとする。
なんでこんなに人が好くて仕事の出来る人をリストラなんかしたんだろう。
その会社の社長を殴ってやりたいくらいだ。
ぼんやり考えながらテーブルに案内する。
先輩の持ってきてくれたクッキーとそれに合わせた紅茶を注ぎ向き合う形で座った。
「それで話って？」
先輩に銀じいの昨日聞いた話をこと細かく話す。
最初は流石にビックリした様子で聞いていたが俺の真剣な様子に冗談ではないと感じたんだろう。
最終的にはこれまでにないくらい真剣に話を聞いてくれた。
聞き終わった後、先輩はしばらく悩んで意を決したように口を開いた。
「……で信也はどうしたい」
「……それを決めかねてるから相談したんですよ……自分でも頭いっぱいで……」

「俺は信也はどうしたいか聞いたんだよ」
「っだから……！　」
先輩の顔を見てはっとした。
先輩が泣いている、多分先輩自身気が付いていないのだろう目を真っ直ぐ俺に向けて目じりからまるでぼたぼたと水が落ちている様だった。
「俺は正直信也と知り合ってそんなに立っていないし、俺がどうこう言う筋合いは無いのかもしれない。だけどな知り合った当初から信也は誰かに頼るのが苦手だったよな」
「それは……」
「んー頼るのが苦手とは違うのかもな、お前は優しすぎるんだよ」
「そんなことな……」
「いやいや……最初は大人の付き合いで割り切ってそういう風に接してるのかと思ってたんだよ」
「だけど、兄弟に接しているお前も同じ態度で接しているのも見て、誰にでも同じ様な態度のお前を俺がひっぱってやらないとと思ってさ、でも知らず知らず俺もお前に頼ってたのかもしれないな……」
先輩の言葉を聞いて俺も泣いている事に気が付く。
「もう1度聞く、お前はどうしたい？」
「俺は……っ俺は本当はここじゃなくて向こうに行ってみたい……です。向こうで父さん、母さんに会ってみたいし、たとえ会えなくてもどういう生活をしていたとかどんな気持ちだったかとか感じたい」
「ずっと苦しかったんです、まわりが当たり前に両親が居て俺達も銀じいは居たけど、父さん、母さんってのが居なくて……今の知り合いともう会えなくなるかもしれないと思うと辛いです……でも自分の両親と会えなくなるかもしれないと思うと一生後悔すると思うんです。先輩から見たら俺の意見って冷たいと思うかもしれないけど……っ涙とまんねぇ……」
「ううん、優しい後輩のお前だからこそきっとそういう選択をする

と思ったよ」
「むしろ、違う選択をしてたら殴ってたかもしれないなーあはは……まぁ……もしかしたら会えなくなるかも知れないけど、また会えるかもしれないんだろ？そうしたら色々聞かしてよ、な？」
胸が苦しい……先輩は俺の話しぶりから本当は行きたがっているのを見抜いていたのかもしれない。
頭をがっしがしなでられた。
その後家にあった人生ゲームをしながら沢山話をした。ずっと先輩は笑顔で明るく話をしてくれた。
途中で勇次と有希が帰ってきて人生ゲームをやり直し遅くなったと言って夕飯はあるもので先輩が作ってくれた。
結局料理はそんなに得意じゃないからと照れ臭そうに笑い鍋を食べてお開きなった。
先輩は明日出勤で俺の事は店長に話を付けて辞めさせてくれるって悲しそうに笑ってくれた。

明日から他の人にも連絡しないとな。
その前に弟と妹にも説得しないと……。
俺の胸には少しの悲しさとそれ以上の嬉しい気持ちで溢れていた。

## 第二話　長男の気持ち（後書き）

読んでくださり、ありがとうございます。
しばらくは辰巳兄弟たちの葛藤を書こうと思ってます。
それと異世界に兄弟が行こうとする動機をうまく表現できたらいいなと思ってます。
今は主人公視点で物語が進んでますが、度々次男と長女に視点が変更する場合があります。

## 第三話　波乱への扉（前書き）

よろしくお願いします。

## 第三話　波乱への扉

「はぁっはぁはぁ……ッゲホ」

某所にて雨の中音も出さずに走り続けている影があった。

短いスカートの水を払うように仰ぐ、もっとも既に払えないほど濡れていたが。

そこから覗く健康的な足は細く長く、それでいて少し筋肉質で、それ以外の条件も相まって彼女がただの少女だとは言いがたい。

まずは服装だ。

落ち着いた色で所々にスリットが入っている。

見る人が見れば風の抵抗を極力抑えた機能的なデザインになっているのに気がつくだろう。

その下は短い丈のスパッツになっており、綺麗なラインは見えども大事な部分はどんなに動いても見えない。

足には不思議な素材で出来たひざ当てがついているぴったりとしたブーツ。

腹から胸にかけてふくろうの翼のような模様が刻まれている革鎧。

それと連携してつながっているような肩当も付いている。

そして肉体的な特徴。

目の色は赤、髪の毛も赤で極めつけには狸の尻尾と耳が付いていた。

その格好を見て通常であれば誰もが覗いてしまうだろうが、不思議と皆気がつかず通り過ぎていく。

彼女は日本でいうところの化け狸と呼ばれるものに近しい。

近しいと表現したのは彼女の一族は元は地球生まれではないのだ。

彼女は遠い異世界で生まれた化け狸である。

厳密にいうと異世界では落人と呼ばれていた。
何故そう呼ばれるようになったかというと、化ける動物の類は元々は神格の高い神の使いだった。
しかし、神を騙したりなんらかの罪を負うと神の使いとしての力の一部を奪われ、力の弱い動物にされて神の城から追い出されたのだ。
追い出された動物たちは残っている力を使って外見を人間に変えた後、神に反発するように異世界内に神に見破られない強力な結界を張った村で肩を寄せ合っており、晩年暮らし死んだり生まれたりを繰り返し過ごしているのだという。

落人の特徴として、人になりきれないわずかな動物のパーツが残っている事と、相手に存在を認めさせない隠れる技術とすばやい動きである。
手先も器用なため好奇心旺盛な落人の一部は、冒険者または探索者のパートナーとして生活しているものが多いようだ。
彼女「ルビィ・ウィーコック」もその一人であった。
ルビィは信也達兄弟の母である「辰巳　零御（れいみ）」の御使いである。
元々冒険者として名高かった少女はある遺跡の調査をする任務を行っていた。
しかし、長年冒険者としてやってきた慢心かその遺跡の守護する魔物たちに捉えられてしまい手をかけられそうな時に助けられた。
その後、御使いとしての力に目覚め今日に至るわけだが。

今回、彼女は大切な主（あるじ）でもあり、親友でもある零御の頼みで彼女の子供達を捜しているのだ。
「どこ！どこなの？！　お願い……早く彼女を救ってあげてよ！！」
幸い、泥るんでいる土などは無く殆どの大地はコンクリートで覆

われていたので足を取られて体力を削られるという事はなかったが。
「……落ち着かないと、深呼吸をするのよ」
瞳を閉じ彼女と同じ力が無いか懸命に検索を行う。
必死の捜索のおかげかある程度エリアを絞り込むことが出来た。
「よし、さらに範囲を狭めて……苦しいけど耐えないと、きっと彼女の方が苦しいはずなんだから……」
彼女の大きな瞳に薄く涙がにじむ。
「泣いちゃだめ！　」
必死に彼女は自分を励ましながら検索をひたすらかける。
例外でなく、異世界と呼ばれる世界は元々神の空想から生まれたものだ。
当然、すべてにおいて神の力によって存在している、よって自然の理をずらして新たな自然現象を起こすことはとてもやりやすくなっているが殆どが物理的なものとものとの間接的な部分によって存在している地球では矛盾を強引に起こしている状態より非常に力を使ってしまう。
彼女はとても力の強い部類に入るのだが、有限である力を使い負担の大きいことをしてしまえば力の底が尽きてしまうのも時間の問題だった。

「……見つかった。きっとここが子供達の」
確認のため再度力を使い検索を行う。
間違いないと確認した時に力を使い果たし、気を失ってしまった。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
今日はせっかくの土曜日なのに大雨だ、勿論事前に俺は天気予報で知っていたから洗濯はしていない。
カーテンを開けて天気の様子を伺う。
いつもの様に弟と妹の料理とお弁当は完璧に終わらせた。
「っといけない！手紙送っておくの忘れてたわ」

確か、家の前の道路の先にポストがあったはずだ。
わざわざ少しの間歩くだけだ、多少濡れても問題ないだろ。
俺は面倒だという事で、傘を差さずに外に出る。
少し雨が頭から髪の毛を伝って落ちてくるのがくすぐったい。
小走りでポストに向かう。
ポストへはがきを入れ終わると自分家の敷地内の庭に倒れている女の人が居るのに気がついた。
「あ、あの……大丈夫ですか～……？」
あわてて駆け寄るが反応が無い、んー、まさか死んでないよな？
改めて見ると凄く不思議な格好をしていた。
そして耳……？何だろうアクセサリーだろうか。
「おーい、風邪引きますよ～？」
ゆすってみたが起きる様子はない。
呼吸はしているようだけど弱々しい気がするどうしようか、具合悪いのか？
そのままにするのにも申し訳が無いと思い、仕方なく女性を抱え込み家まで何とか運び、軽く手足を拭いて静かに寝かせた。
ちょうど朝ごはんを食べようとしていた有希と勇次が酷くびっくりしていたので
勇次にはご飯食べてもらい、有希に簡単に状況を説明し、ご飯でも食べている。
暫くするとゆっくりとドアが開き有希が顔を覗かせた。
「信兄？着替え終わったから布団に寝かせてあげて？」
「勇次、悪いけど手伝ってくれないか」
「分かった」
勇次に手伝ってもらい、あまり動かさないようにして運ぶ。
とりあえず客間に布団をしき、そこに寝かせる事にした。
――――――――――――――――――――――――――――――――
頭寒足熱（ずかんそくねつ）の法則にしたがって掛け布団をかけて頭には熱を冷ます

シートをのせる。
そのまま放置しているわけにも行かず、試験のテキストを持ってきて客間でやる事にする。
テキストを目を通しながら不思議な客人をどう扱うか考えあぐねいていた頃。
突然、がばりと音がして不思議な客人に目を向ける。
「っは！ここどこ？！」
なんだか混乱しているみたいだキョロキョロ周りを見渡している。
暫くすると俺が居るのに気がついたみたいだ。
なんだか混乱すると思い、どう声をかけようものか迷っていたんだけどな。
「あ、はじめましてえーっと……」
「！！」
俺を見たとたんその人は酷くあわてていて、いきなり布団をどかし土下座の格好に。
「貴方は？！辰巳家次期党首とお見受けいたします、今回の突然の訪問をお許しください」
さっきの驚いていた時の口調とは打って変わり、丁寧な口調に変わって少し驚いた。
「……はい、確かに今は俺が一番年上で家主扱いになってますが……貴方はどちら様でしょうか……？」
「？！まさかまだ力は目覚めていらっしゃないのですか……」
「……えっと」
「失礼いたしました、私は「ルビィ・ウィーコック」と申します。貴方の母である零御様の御使いでございます」
頭をふかぶかと下げ、完全に土下座の格好だ。
土下座ってドラマやなんかで良く見るけど、あんまり気持ちのいい物じゃないんだな。
「どうか顔を上げてください……私は辰巳信也といいます。まだ銀じいええと銀郎から話を伺ったばかりでピンと来てはいないのです

が」
「ルビィさんは俺の母さんの御使いさんって事ですね」
少し、緊張を解く。
ルビィさんは安堵の表情を浮かべていたが慌ててかしこまりこう言った。
「大変ご迷惑を承知で申し上げます、私は零御様の命で地球に赴き信也様方に協力をお願いしようと思い訪問いたしました」
「協力、ですか？」
「はい、今はアイネ　ファンタジー　プラネート、えっと地球から言う所の異世界ですねそこは平和を保っては居ますが」
「はい」
「あと１００年後には私達の住んでいる異世界も滅んでしまうのです」
「お願い！助けてください！！私達御使いの力では力量不足で……」
ルビィさんは瞳に涙が零れそうになっている。
「そしてこのままでは信也様のお父様、お母様もいずれ……いいえその為にお願い申し上げたのです！！！　」
そんな事は考えられないと軽く頭を振る。
もう何がなんだか……。
この間、つい2日間前に聞いたばかりだというのに。
やっと先輩と話して落ち着いてきたというのに。
どうしてこう物事は緩やかに穏やかに進んじゃくれないのだろうか……。
「っ……それはどういうっ！あ、えっとすいません一度弟と妹も家に居るので呼んできていいでしょうか」
「はぁはぁ……すいません私も、少し焦りすぎていたみたいです、お願いいたします」
「……はい、申し訳ありませんが少々お待ちください」
ゆっくりとふすまを閉める。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

柱を背に少し寄りかかった。

体がしびれたようになんだか痛い。

心臓の音がうるさい、どうか静まってくれ。

瞳を閉じ落ち着かせる。

これはもう戻れないという事なんじゃないか、引き返せないということじゃないか。

俺の長男としての責任感が今の自分を支えていた。

しゃんとしろ！　こんな情けない姿なんて見せられるか！

自分の胸の上に拳を乗せる。

俺は波乱への入り口までの道が僅かだと言う事を悟った。

腹を決めよう、これはきっと俺自身の戦いの始まりだ。

自分の両頬を両手で強く叩き弟と妹を呼ぶために廊下を歩き出した。

## 第三話　波乱への扉（後書き）

急いでる空気感がうまく出せるようになりたいです。

## 第四話　悲しみの先の僅かな希望

俺は、有希と勇次の待つ居間へと向かった。
どうやらルビィさんが起きたのに気がついていたのか、2人共ご飯の片付けを終えてテーブルで待っていてくれたらしい。

「有希、勇次。すまないが話があるからこっち来てもらえないか？」
「うん」
「あぁ、分かった」
客間のドアを開けて2人を並んで座らせると自分も座る。
「少し遅くなりました」
「問題ありません」
「俺の隣に座っているのが弟の勇次でその隣に居るのが有希です」
「よろしくお願いします」
「よろしくお願いします、先ほど雨で濡れていたみたいなので私が着替えをさせていただきました」
「あ、ルビィと申します。ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした」
お互いにお辞儀をする、我が弟、妹ながら初対面の人には丁寧な言葉を使う癖が付いているようで、少し誇らしい。

「それでは、人数もそろいましたしお話を改めて伺いたいと思っているのですが体調の方はいかがですか？」
「かまいませんよ、元々私の方がお願いする立場なのですから」
「有希、勇次要点だけルビィさんにも確認を含めて説明する。良く聞いてくれ」
「まず、ルビィさんは俺達の母さんの御使いらしい」
「お袋の御使いの人なのか」
「お母さんの御使いなのね……」

「では、お互いに自己紹介も終わった事ですし次の話を進めさせていただきます」
「貴方方のお母様である零御様が今大変な事になっているのです、今は余裕が少しだけあってなんとかその場に行ってしゃべる事は出来るのですが……」
「貴方方の言う異世界と呼ばれる世界の出来たあらましというのは、神の仮定によって作られたというお話はご存知ですね」
「「「はい」」」
「そこで人間以外の長寿の種族などは気をつけなければいけない存在が居るの」
「それは亜空魔族と呼ばれる者達で……」
「悪魔族ですか？」
「いいえ、違います。亜空間の亜空と魔族書いて亜空魔族です」
「亜空魔はその名のとおり、時空の歪みから発生する亜空間から生まれ出る魔物という意味で姿は体が美しい人間で手足が昆虫の手足のようになっており、決して強くは無い力の弱い種族です」
「その亜空魔族が良く空から降ってくるようになってしまったのです」
俺は思わず疑問に思ったことを口に出していた。
「亜空魔族が弱いのであれば襲われた時に裁く事は出来ないのですか？あ……口を挟んでしまってすみません……」
「御気になさらずに、確かにそういった発想が最初は出た事があったのですが……その行為はとても危険な事が分かったのです」
ルビィさんは少し悲しそうな笑顔で答えてくれた。

「危険とは？」
「はい、亜空魔族は寄生を行い力を付け子供を授かります。人を襲う種族なのです」
「人を襲う？何故ですか？」
「はい、弱い種族ゆえになのでしょう。亜空魔族は単独では弱いの

ですが、他の種族に寄生する事によって寄生した個体を意のままに操る事が出来るそうです」
「意のままに操る……？」
「はい、しかも亜空魔族は幻を産み出す事をもっとも得意とする種族です」
「騙されてしまうのですか？」
「そうなのです、しかも一度かかるとそう解く事が出来ません……」

ルビィさんいわく術を終えるには2種類の方法がある。
一つは術にかかる前に反射する方法。
しかし、反射する術というのは基本的に精神力が物理的に例えば炎といった様な具現化された物に対しての跳ね返すという精神力を具現化するというのはやりやすいが、幻を具現化した物を跳ね返すという術は具現化しづらいのだそうだ。
「幻はあくまで幻なのです。例えば誰かが目に見えない気持ちを想像した者を具現化させると言う発想も通常では難しいですし、それを跳ね返そうという発想も想像出来ないと思いませんか？」
「確かに……言われて見ればそうかもしれないです」
確かにそうだ。ファンタジー小説なども学生の頃は良く読んでいたので魔法というものが当たり前に存在しすぎてその発想が浮かんでいなかったが、人の思いを具現化するという発想はあまりにも抽象的過ぎて捉えずらい。
ましてはそれを反射する？創造がつかないな。

ふと弟と妹が反応が無いと思い、振り返って見たんだけど俯くばかりで表情は読み取れなかった。
今はとりあえず話しを聞こうと思い、ルビィさんの方を向きなおした。
もう一つは本人が中止または終了する方法。
それも、かけた本人が寄生するとはいえ既に寄生している状態で

自らの意思で停止する気は無いし、かといってこちらが意図的にやろうとする前に既に寄生している訳だから出来るはずも無い。

「では、今現在はどの様に防いでいるのですか？」

「世界一体を包み込む大きなバリアを張っているのです。自らの命を引き換えにして、ですが……」

「え……それはどういうことなのですか？！母さんは何をしているのですか？！」

「だから！貴方方のお母様が大きなバリアを張っているのです！！！」

ルビィさんも限界だったようだ。

本当はというと俺も爆発寸前だった。

何で母さんが犠牲にならなければいけない？

もっと、他に有能は人は沢山いるだろう……？！

ルビィさんは力尽きたように体を丸めていた。

多分、泣いているのだろう、直ぐ下の白いシーツに水がポタポタと濡れている。

「……うっぐすっ私に……私達御使いにもっと力があればここまでしなくても良かったのかもしれません」

「元々、そういう決まりごとがあった、という……のとっ、他にこの様な広範囲を防御する手段を誰も持ち合わせていなかったのです」

「各種族の族長などにはせめてもの足しとして族ごとの精一杯のエネルギーの元となる、精石というのと安全に術を駆使出来る場所の提供をしていただいております」

「そのお陰もあって、少し余裕があるという程度で、零御様はその場を動く事が出来ず、他で費やせる力というのはあまり多いとはいえません……」

「私はせめてもの助けと思いここに参りました。信也様達には原因の調査と……出来れば解決にまでこぎつけて欲しいのです。協力してもらうというのは最初は零御様も反対されておりましたが……現

段階では代価案も無く……その、申し訳っ……ありません……！」
「……そんな……意味の無い謝罪なんて、要らないですよ……！」
勇次が床に拳を叩きつけた音が響く。
ルビィさんは布団に頭を打ちつけるようにして土下座をしている。
布団はルビィさんの涙で濡れそぼっていた。
有希も涙をぬぐう事もせずルビイさんを無表情で見つけているみたいだ。
怒りの矛先をルビィさんに向けるのもおかしいのは勇次も分かっているはずだ。

俺もルビィさんに怒りを無意識に向けようとしていたようで、睨んでしまった表情を意識的に緩める。
「そうですよ、ルビィさん。謝っても仕方ありませんよ？今は謝罪よりも実行するべきなんですから、ほらそんな顔しないで下さい」
「それと、もう敬語は止めないか。これからも付き合いはあると思うし、ルビィさんも敬語使うの大変そうみたいだし、な？」
俺は勤めて柔らかい表情を出してルビィさんを励ます。
ルビィさんは小さくありがとうと呟いたのが聞こえた。
今はそんな事やっている場合じゃない。
もしかしたら危険は多いかもしれないけど逆に考えれば俺達なら解決できるかもしれないのであれば……。
「俺は、俺達は小さい頃から母さんや父さんが居ないと言われて過ごしてきました。だから居るって聞いた時は凄く嬉しかったんです」
「でも母さんは言い方は悪いですが、きっと母さんの命の力で今やっと異世界を守っている」
「俺は、母さんの顔も見た事は無いけれど母さんがせっかく守った世界を無駄には出来ない……後悔はしたくない」
「それに俺達が早く助け出せば母さんと生活できるかも知れないぜ、兄貴」
勇次がウインクして見せた。

っは！言ってくれるよ！
「そうだよ！皆でお母さん助けようよ！」
と有希。
「勿論、私も連れてってね！微力ながら助太刀するわ！」
とルビィさんが目を真っ赤にして微笑んだ。
「行ってくれるか？みんな」
「あたりめぇよ」
「行くなって言っても兄たちについてくよ」
「皆さん……本当にありがとう」
雨降って地固まると言うけど……天気も俺達の気持ちを代弁するかのように、いつの間にか雨雲に光が差し始めた。
父さんの行方については、ルビィさんが聞いた母さんの話だと異世界のどこかで旅を続けながら原因を調査しに行ってるみたいだ。
行こう異世界へ。
俺達に何が出来るかわからないけど、後悔しない為に！母さんと父さんを助けるために……
胸が温かい気持ちでいっぱいになる。
それと同時に気持ちがストンと落ち着いたのを感じた。
あぁ……俺がしたかったのはこれなのか。
と、そこへ軽い爆発とともに煙が上がる。
「ケホッ、な、なに？！」
俺達が煙の発生源を探してると知っているような声がした。
「お前達、儂を忘れてもらっては困るのぅ……」
「銀じい！！どうして？！え、どういう……？」
「ファッファファ！驚いて折るようじゃの？」
いたずらが成功した子供の様な笑顔をした銀じいが居た。
「お前達が、異世界に行くにしてもまだ二、三日待ってもらう必要があるんじゃ」
「異世界からの世界の応答を確認するには一週間かかるからのう……」

「そこでじゃ、その間にしたくと軽く準備をしてもらってから異世界に行ってもらう」
これからにぎやかになりそうだ。
お互いに笑いあう、どんな困難があったとしても乗り越えて行ける。
俺はそう感じずにはいられなかった。

## 異世界について（銀じいの巻物）（前書き）

こんにちは、守護人たちへを読んでくださりいつもありがとうございます。
作者の鈴華と申します。

今話につきましては、異世界に主人公達が突入する前に異世界についての世界観、ルール等についての説明とさせていただきます。
勿論、ある程度の説明は入れますがあまり長い説明は極力省こうと思っているので、お手数ですが混乱時にはこちらの方で確認お願いいたします。
ではご覧ください。

## 異世界について（銀じいの巻物）

現段階の登場人物
異世界への旅に同行する仲間達と兄弟と妹の紹介です。

辰巳　信也
年齢２２歳　男
メインの主人公視点の信也君です。
見た目はこげ茶の髪に少し色素の薄い青みがかった黒。
身長１８０？体重７０ｋ中肉中背。
体育大学を卒業し、教育職員免許の勉強中。
将来は体育教師になるのが夢。
本来は面倒見がいい兄貴タイプなはずが最近はありえない事件の連続で情緒不安定気味です。
趣味は家事全般と読書家事の腕はおかん級。
最近の悩みは妹の扱い方について悩んでます。
実はあるトラウマを抱えてます、すぐには出しません。

辰巳　勇次
年齢１８歳　男
こげ茶の髪に茶色の瞳。
身長１７３？体重５６ｋ中肉中背。
信也の弟。
コックを目指しており、現在調理師の勉強中。
実はメガネ君で普段はコンタクトしてます。
口は悪く、誤解されやすいが根は素直ないい子です。
割と空気読むのが得意で信也をサポートする。
信也の事は尊敬している
激しい運動は苦手だが、弓道部に所属しており弓の腕はぴか一で

す。

辰巳　有希
年齢１６歳　女
こげ茶の髪に茶色の瞳。
身長１４８?体重４０ｋ中肉中背。
信也の妹。
水泳部の期待の星……らしいです。
将来何になりたいか悩んでいみたいです。
子供だけど大人に扱ってほしい難しいお年頃。
信也、勇次の事は尊敬しているが、口では言ったことない。
言動は割とズバズバ言って猪突猛進に思われるけど頭ではかなり冷静。

辰巳　銀朗
精神族の攻防人。
グレーの髪に黒い瞳。
身長１６８ｃｍ体重６０Ｋ少し筋肉質。
信也達の育ての親。
１５２０歳が本当の年齢であるが、人間界では８５歳で肉体が滅びた。（２年前）
元は精神族であるため死んだばかりの死体か力のある物であれば移ることが可能。

ルビィ・ウィーコック
赤い髪に赤い瞳。
身長１６０ｃｍ体重５０ｋ全体的に引き締まった柔軟な肉体。
信也達の母親御使い。
獣神族の化け狸の女性。
説明は有りませんが、獣神族の中で一番化ける力が強くて非常に

出来る人。
本当は堅苦しいのが苦手だけど公私混同は弁えようとする真面目な人。
狸なのは完全に私の趣味です。
狸って可愛いよね！

では、次に世界観　仕組みについて。

異世界　パラレルワールドとも呼ばれる。
元々は神の仮定から出来たものだと言われる。
昔、地球に生物が誕生し恐竜が世界を支配していた頃、大きな惑星が地球にぶつかり地球と月が分離したときに恐竜の力がもし惑星の力を上回り、地にぶつかる衝撃を抑えられたとしたら地球はどのようになったのかという神の仮定から生まれた惑星。
仮定という幻想にも等しい原理なためすべてにおいて神の力で出来ている。
そのため宇宙にはいるものの太陽の光が当たったとしても光の屈折で何かがそこにはあると思われるだけで、実態をつかむことは難しくましては照り付けない時間帯においては宇宙のわずかな星の光では到底見ることはかなわない。
その惑星は俗に言う「異世界」と呼ばれるものである。
こちらではパラレルワールドと呼ばれているが、その惑星の人たちからすると当たり前に存在している世界なので呼び方が違う。

異世界と地球について。
異世界は神の過程から生まれているので地球よりもすべてにおいて負担が少なく、異世界の者が地球に行くと力を使ったり移動するだけで体力の消耗が激しい。
逆に地球の者が異世界に行くと負担が軽くなり身体能力などが通常より上昇しやすくなる。

その性質を利用したのが守護人の育て方である。

［種族について］

守護人とは

守護人神の血と涙それと人間と妖精から作られた種族。

そのプロトタイプが神使族である。

しかし神使族では守護人のそれと違い未完成なために、力の強い神の力に小さな体が耐え切れず。

ある条件で暴走してしまったりするが、守護人はそれはありません。

人寄りである為に最初はとても精神、肉体が弱いが人間のいいところである成長する力がありとても柔軟性に優れている。

神の血と涙の力である神力や人の力である道具を扱い創造する力精霊の力が使えるが、その力の源は大地や生き物などを体内接種したときに消化器官と共にか睡眠時間などに無意識に行うまた妖精族の特徴ともいわれる光合成によっても供給される。

其々の個体によって受け継がれる力は異なるが男は攻撃寄りで女性は守り寄りな場合が多い

守護神であるがゆえに不老不死の存在であるが、世代交代すると人間に戻りその後老いて死ぬ。

世界の犠牲者とも言われている、その代わり役目を全うし人間となった時には神の褒美として一つだけ願いをかなえることを許されるという。

御使い

守護神1人につき人族ではない者から5人選ばれる。

その種族が選ばれるかわからない。

物（武器や防具）か精神か動物か存在か不明。

妖精族

光合成や大地の植物に力を分けてもらい、力を駆使する事が出来る。
特徴として頭に生えている半透明の触覚と昆虫のような羽をもつ。
役割はすべての大地の力を使える膨大なエネルギーを分散させる役目をもつ
正しき者に力を分け与えたり、悪しきものにさばきを与える。

人族
すべての祖であるといわれている。
体の構成などは人間を元に作られているものが多い。
これといって力を持たないが元は神がすべての種族の基礎になるように作られた為、繁殖力と成長力に優れており、また知性が高くすべてにおいての創造の力を持ち。
族と族を取り持つ役割を持つ。
故に人の間と書いて人間と呼ばれる事もある。

獣族
知性が低く身体能力が高い獣と成長、繁殖、知性がある人間がかけ合わさってできた。
見かけとは裏腹に温厚なものが多い。
部族として暮らしており、国と国を渡り歩き行商人になるものが多い。
役割は世界の監視、神への連絡係。

精神族
すべての生き物の肉体が朽ちた後に残る精神。
膨大な数を誇る。
獣族と協力しともに連絡を行ったり、妖精族の補佐も行う。
他族がたどり着くことない天空の島に住む。
精神族は朽ちたばかりの肉体を用いて生活する事が出来る。

しかし、一度使った肉体に再度入ることは出来ない。

竜族

元は隕石の力を弱めた恐竜たちが、惑星を守った褒美にと神の一部を分け与えたのが祖だとされる。

神ともっとも親しく対等に近いとされ、世界の象徴。

翼族

スパルナという美しい翼を持つ者の意とも呼ばれる。

腕力はあるが後は飛ぶことが出来るのみとなっており

美しい容姿のものが多い。

古来から移動の際に配達人として使われていたとされる。

翼は高く売れるが、違法。

獣神族

神の力と獣の力、人の血を混ぜて作られた。

元々は神格の高い神の使いだった。

神を騙したりなんらかの罪を負うと神の使いとしての力の一部を奪われ、力の弱い動物にされて神の城から追い出された。

追い出された動物たちは残っている力を使って外見を人間に変えた後、神に反発するように異世界内に神に見破られない強力な結界を張った村で肩を寄せ合って晩年暮らし死んだり生まれたりを繰り返し過ごしているのだという。

落人の特徴として人になりきれないわずかな動物のパーツが残っている事と、相手に存在を認めさせない隠れる技術とすばやい動きである。

手先も器用なため好奇心旺盛な落人の一部は冒険者または探索者のパートナーとして生活しているものが多い。（第三話一部抜粋）

亜空魔族
亜空間の歪みから生まれた古の時代からの排除される存在。姿は美しい人間の体に昆虫の手足になっている。
幻を見せ人間に近づき人間に寄生し破壊行動を繰り返しながら人間の心臓を毛細血管から管を通して無痛で通し心臓を食い破る。
人間に寄生する前の亜歪魔族は小さな子供くらいの大きさで力は決して強くないし食い破るのも直ぐでは無く約５０年ほどかかりじっくり壊していくので人間等にはあまり被害にならずに肉体が滅びるが、多種族でも見破れない幻を見せるのが厄介。

魔物
動物から負の精神をもって生み出されたとされる。
攻撃的で知性が低い。

聖物
正の精神をもって生み出され、神の手が加えられたものの事。
温厚で義理堅い、知性がある。

動物
一般的な家畜や人と暮らしている物の事。
牛、豚などがそれにあたる。

［世界の職業］
商人
お金を扱い商売をするものたちの事。
すべての商売においてお金の管理は商人の仕事。

料理人・職人

商人とペアになり商いを行う、それぞれ店をやるには試験を行い権利書を発行しなければならない。

医療人
漢方や塗り薬など生活に必要なものを扱う者。
処方されたものであれば一般が扱えるが中毒性、生命にかかわる薬などはこも者の取り扱いが　必要。

攻防人
戦いで生計を立てる者の事を一般的に言う。
国の専属になったり、自由に世界を渡り歩いたりする。
ただし、生命に危険があった場合や例外として許される立場であるもの（王族や守護人がこれにあたる）であれば問題ない。
その場合は役所へ申し出て証明書と引き換えてもらう必要がある。

石使い
一般的は精石を使い自分の血肉や精神力でそれを補い、世界の理を避けて火を放ったり、水を飛ばしたりするものの事をいう。
別名マジシャンとも呼ばれる。
即座の判断能力そして生まれ持った精神力などを使うため
体力の消耗が激しくそれを抑えるためのマジックアイテム、精石などを使う必要があり
ものにするにはお金と時間が必要。

化け術使い
獣聖族が独自に唱える化け術を使い、気配を消したり、見えない所を除く術、別の人に変装する等に長けていて
レンジャーの様な役割を果たす。
また、術を駆使可能な獣聖族達は種族的に速さにたけた者が多く持前のスピードを生かした攻撃や万物の力を使って現象を引き起こ

したりもする。

占い師
精神力が秘められた、タロットカードを使い想いの力で現象を具現化する。
また手のひらサイズの丸い水晶を持っていて、その水晶に精神力を与える事によって実態の無い武器を作り出す。

精霊使い
精霊の好むアイテムや贄（食べ物や物）を使い精霊の力を借りて自然現象を起こすもの事
例外として精霊が気に入った相手や恩の礼としてお互いの血を１０分の１交換し合い
呼びかけのみで起こすものも居る。
精霊の力はそれに対応するエリア、対象がないと効果が発揮されずらい。
もしくはある一定の制約において発動させることも可能。

聖物使い
神からの依頼に遂行できるもののみ譲り受けることが出来る聖物を駆使するものの事
神からの証が必要で極稀。

魔法使い
悪しき者の力である魔力を用いて自然の理に反する力を駆使する。
無理やり理を捻じ曲げるため、空間が歪んだり己が滅びることがある。
使っただけで世界の取り締まり対象となり、極悪人扱いとなる。
何故極悪人になるかというと理由は２つです。

１、魔力は人間にはなく亜歪魔族と呼ばれる種族の血を使って注発動する事が出来る為注入する必要があり、やりすぎると亜歪魔にカモにされやすい。
２、そもそも、亜歪魔を近づける事が危険な為。

※能力の話、一般に魔法と呼ばれる者は邪道と認識され、口を出すのもはばかれる。
変わりに精霊術（精霊を駆使して術をだす）か精石術（精神力から作られる石動物や種族の精神によって若干違うが、感情の高ぶりなどで出来る）や聖物魔法（聖物を駆使する）が発達している。

お金の説明。
お金
単位＝リング
色で分けられる

黒リング＝１円
緑リング＝１０円
赤リング＝１００円
青リング＝１０００円
黄リング＝１００００円
白リング＝１０００００００円
それ以上の多い場合はカードで代用される。
生活用品などは日本より安いが交通費、武器やアクセサリー、防具は高い。

長くてもうしわけありませんでした。
次回からは通常の話に戻ります。

# 第五話　異世界へ（前編）

小鳥が歌う。
葉が踊り、花は笑う。
太陽の日差しが木々の葉と葉の隙間から差し込んで。
草木が風に吹かれ囁いている。
まるで大地が喜んでいるような森の中――
俺達は芝生の下で腰を下ろし、直ぐ傍の湧き水を汲んできてくれるであろう銀じいを待っていた。

――――――

場所がいたる所に存在する。
異世界で生きていくためのその為に銀じいから手解きを受け、訓練を行った。
まずは自分が傷つけられても冷静で居られるようにする訓練。
銀じいの話によると俺達は決して死ぬ事がない様に造られているそうだ。
ただ、人間の構造上と機能性として痛みというのは備わっている。
切られたら痛いし、血が出るしヒリヒリするのはかわらないのだ。
ただ守護人なので死んでしまうという事は無いが、体がいくら強くても心は防具もつけれないし術などでも補えない。
怪我をして恐怖で武器が握れないという事があっては大切な者を守る事が出来なくなるかもしれない。
そのような事が無いように痛みになれるという事をやった。
銀じいから指示されたやり方はとても簡単だ。
包丁の刃の部分を握り続けて慣らすというものだった。
刃を握るとしびれるような痛みと共に血がぼたぼたと落ちる。
俺達は人間の致死量に至ったとしても死ぬ事は無い。
影も形も無くなったとしてもまた赤ん坊として生まれ変わる位らしいから相当な者だ。
この訓練は俺達の性質を持って始めて出来る物で人間だったら死んでいるだろう。
風呂場で行ったが、床が血の海の様になり有希なんて恐怖で気を失ったりして大変だった。
3日間ではまだまだ足りなかった勿論初めてのときよりは少しなれたのかもしれないが。
今回の調査の上で訓練していくしかないのだろう。
もう一つは命を奪う事にも戸惑わないようにする訓練だ。

ルビィに協力してもらい、人の形をした木を元に擬似的に人を作る。
化け術を組み合わせてこちらが攻撃した時に肉を切る感覚と血が流れていると錯覚する様に施してもらう。

これも慣れる事は3日間では出来なかった。
刺す度に伝わる肉の感触。
流れ出る血、変形する肉。
俺達は決して守護人に元々なるべくしてなったという訳ではない。
なのに血が覚えているというのか上手く表現出来ないがその対象物が敵だと認識したとたんに血が沸き立つような高揚感に包まれ気がついていたら「舞っていた」のだ。
自分の時はどの様に見えているかなんて気にも留めていなかったけど、ルビィさんが取ってくれた俺の戦闘時のカメラ映像を見て自分でぞっとしてしまった。
本当に舞っているのだ、そういった事は素人なのでまったく分からないのだが。
まるで日本舞踊でも踊っているかのようだった。
これは銀じいの言うところによると、血が覚えているという事なんだとか。
気持ち悪くなったのは人の形をしていた物が肉片になった事も関係がないとは言えないが、仮にも今まで平和に過ごし死とは無縁の世界で生きていたのに関わらず、命を奪う事に躊躇せず実行できてしまった俺達自身が気持ち悪いと思ってしまった。
当然、一日目は何も食べる気にもなれず肉類を見ただけで吐き気を催していたが、異世界に降り立って移動の為の装置から降りすぐに、この世界で生きていく事の厳しさをまのあたりにしてしまい、自分の意識を改めた。

人が死んでいるのだ。

既にミイラ化が進行している。
銀じいの話によるとこの者は服装から見て地球から間違えて降り立ってしまった遭難者ではないか、との事。
この場所は周りは木が生い茂っているばかりで人の気配が無いところである。
予備知識も無いまま突然ここに来て何もかもが整備されている現代での暮らしに慣れた人にとっては決して愉快な状況ではない。
自然界は大らかではあるが来る者拒まず、去る者は追わない。
しかも、結界内に入りこんでしまっているとなると、その結界内の防衛システム者達に処分された可能性もぬぐえないとの事。
何かの生物が居なくなったとしても世界にとっては些細な事に過ぎないのだから――。
そう考えると俺達の戦闘能力は有難い物だったと思い直すようになった。
例えば毒蛇が俺達を襲ってくるとしよう。
俺達の皮膚を傷つけられる前に無意識に叩き割る事が出来るのだ。
これほど心強いものは無かった。

――――――

ころだが、まずは一旦の拠点となる住処(すみか)が欲しい所だ。
一刻も早く街に進みたいところである。
その為にも料理を悠長に作っている暇など無かった。
「食べ終わったらすぐに歩きましょう。一刻も早くまずは街に向かわないと生活が出来ないわ」
ルビィさんに言われた通りに俺達は手早く食事を済ませると、ひたすらに歩き続けた。
ただ生きるため、歩くためだけに黙々と食べ、ろくに話もしないで何度目かの夜空と青空の風景を繰り返したのだった。

暫く俺達は歩き続け、いい加減同じような森の景色にうんざりしていた頃大勢の人の話し声が聞こえてきた。
恐らく、街に近づいて来たのだろうか。
今までぐったりして何も口を開こうともしていなかった有希が明るい声で俺に話しかける。
「信兄ぃ！！　街に近づいて来たんじゃない？！　早く行こうよ！！」
俺達をせかす様に有希が走っていく。
「おい、ガキみたいにはしゃいでんなよ！怪我でもしたらどうすんだ！」
勇次が慌ててそれを追いかける。
「あはは、2人とも元気だな」
俺がその後から追いかけるように小走りする。
銀じいとルビイさんは……よし、ちゃんと付いてきている様だ。
「何言ってるの信兄～！　信兄は一番運動神経いいんだから！先に行って引っ張ってくれないと！」
有希が腕を組みながら、上目遣いで頬を膨らませて怒る。
こういうしぐさはまだまだ子供っぽいな。
思わず有希の頭に手を乗せて軽く撫でた。

「わかったわかった、その代わり後ろにも気を配ってくれよ？　」
「兄貴、俺が見張ってるよ」
「頼んだよ」
「もー！　何よ兄達２人して！　子ども扱いしないでよね！！　」
「わーもう、うるせぇなぁ……！　」
「何よ！　」
いつもの喧嘩だ、あいつらホント仲良いな。
そう思いながら先に進むと視界が急に開ける。
街だ、自然と人が上手く融合したような街の造り。
「わ～！！　すごいすごい！　」
有希がはしゃぐのも無理はない。
木と石が合わさったような素材のレンガが綺麗な茶色のグラデーションになっており、その隙間隙間に半透明の色のレンガの様なものも積んである。
窓は波打つ模様のような少しにごったガラスになっていて、それがかえって風合いが良く見えて美しく感じる。
「ほぅ……これは」
銀じいが感嘆を漏らす。
「ここの街は儂が地球に居る間に精霊使いの街になっていたみたいじゃな」
「えっ？　何で銀じいちゃん、そんな事分かるの？　」
「ここの建物はどうやら精霊族の力に満ちておる、恐らくじゃがなんらかの方法で精霊の力を受け取りやすく設計されているようじゃな」
「銀郎、さすがね。そう、ここ２０年ほど前からここは精霊使いの町長が収めていて、追放された術師等が多く移り住むの」
「ルビィ、追放ってどういう事？」
「は、うん、術師や多種族などは人間にとって不思議な現象を起こすものだから、今はそういう事はあまり無いのだけど、昔は偏見みたいなのがあったりしたのよ」

どんな世界でも人間は欲望に忠実で愚かで悲しい生き物だ。
「とりあえず、暫く厄介になるかもしれないから宿を探しましょう」
ルビィにそう言われ皆で街を歩いていく。

## 第五話　異世界へ（前編）（後書き）

やっと異世界のお話が前半掛けました。
文章力が足りず、四苦八苦してます。

## 第五話　異世界へ（後編）

「あった、ここね」
ルビィさんは街の案内マップの様な者を手にある一軒の建物を指さす。
俺達の希望通り小さなキッチンつきの部屋がある宿屋を調べてくれたらしい。
さすがに声には出さなかったが有希が小さく万歳をした。
見られて恥ずかしそうに隠す。

皆で受け付けに向かいとりあえず一週間、男女部屋を分けて宿泊のチェックインを済ませるとそれぞれが部屋へと向かう。
有希は昼まで休憩しに、勇次は荷物を下ろすと銀じいと食材探しに行ってしまった。
俺はと言えば何もする事が無いのでルビィさんに付き添ってもらい武器の扱い方を教わっていた。
この異世界に来て何度も思ったのが武器の扱いにくさだ。
戦いは前に試したとおりまったく問題は無いのだが、意識的に使えなければ強いとは言えないし、今までは動物だったから良かったものの対人となると意図的に戦おうとしない限り命の保障はないだろうな。
俺達は今まで剣道を地球でやっていて、普通の人よりはそれなりに出来るはずだったんだけどな……。
竹刀と真剣はまた別の様で、身体の運び方が難しかった。

――――――

元は守護石と呼ばれるもので色は乳白色をしている、地味な様で居て美しい。
この石はある種族から代々受け継がれている者で従者である銀朗では分からないみたいだ。
今俺達が持っているついては俺達の母さん、父さん万が一の時の為に託されたのだそうだ。
この石には意思というのものはまったくないが、守護人の血の契約を施す事で主と認識され命令に従うようにて出来た神具のようなものになる。
それぞれの特性に合った武器へと変化するらしく、有希は力を補うよう本人のみ羽のように軽いメイスの形状に、勇次は得意の和弓の形状に、そして俺は刀の形状だった。
正直、刀は苦手だと思っている。
どちらかというと運動の延長戦であるナックルとかの方が使いやすいと思うんけど……。

「ルビィさん、ちょっと見本で型を見せてくれよ」
型を見ないと練習のし様が無いと思い思い切ってルビィさんに聞いてみた。
ルビィさん刀って握った事あるのか？
お願いしておいてなんなんだが、戸惑う俺にルビィさんは予想外の反応を返してくれた。
「そうね、向こうでは真剣なんてそうそう見つからないみたいだしね、分からないでしょうね」
「真剣なんて言葉良く知ってるね」
「それはね、零御様が良く言ってたから……懐かしいわ」
くすりと少し懐かしむ様に微笑む、最初は真面目な感じの印象だったけど、何日か野宿を皆で過ごして大分お互いに打ち解けてるみたいで少し嬉しくなった。
俺の武器は俺専用になってしまっているから、銀じいがで持って

る刀を少し借りて型をやってくれた。
穏やかに微笑んでいた顔が急に凛々しい顔つきになり、俺より少し長い刀を構え重身を中央に寄せ刃の向きを変える。
目の前の少し細根の木に向かって上から下へ斜めに切り裂く。
枝の部分が崩れる。
更にそのとがった木に同じように上から下へ斜めに切り、その後上から下へ斜めに切る。
木に刀が触れる一瞬だけ刀がキンと鳴いた。
直ぐ後に手の柄の持ち方を少しずらしたまま持っていた腕を向きを変えるように広げそのまま脇差しへ戻す。
この一連の流れを俺にわかりやすいように少しゆっくりとやってくれた。

「この型は零御様に教えてもらったの、さっきのが基本の型だと言っていたわ」
「母さんに？」
「えぇ、零御様も刀を使って守っていたのよ。昔から真剣という物を地球に住んでいた時にやっていると聞いたわ」
「へぇ……」
自分も同じようにやって見ようと思い、先ほど見せてくれた型を思い直し目をつぶる。
重身を中央に、脇から刀を引き、刀の向きを変えた。
瞬間目を開き、刀を斜めに下ろした。
キンという刀の鳴き声と共に木の破片がずり落ちる。
「ええと……で、出来たのか？」
自問しつつルビィさんに向くとルビィさんは凄く驚いているようだった。
「……信也も真剣刀法を習ってたの？」
「あ、剣道は小さい頃からやっていて、真剣は始めてだけど……」
「そうなの……、だからなのね」

思わず首をかしげるとルビィさんが先ほど俺が切った木の切れたほうを持ってくる。
「この切り倒された部分を見て頂戴」
切り倒された切れ目の部分は半分だけすっぱりと切れてその後がちぎれた様になっていた。
「刀に慣れていないとこの切れ目がちぎれた様になってしまうの」
あーやっぱり苦手だからか……そう思って落ち込んでいると、ルビィさんは首を横にふった。
「違うのよ、本当にはじめてだったらすべての部分が殆ど千切れたような切れ目になっているはずなのに、半分も綺麗に切れているの、その証拠に……ほら」
ルビィさんは自分の切った木を見せてくれた。
ルビィさんの切れ目も俺と同じように半分ほど切れて後はちぎれた様になっている。
「血の成せる技なのか……始めてでこんなに切れるのは相当勘がいいと思うわ。私これでも刀は１０年ぐらい教えてもらっていたのよ？信也は多分もっと練習すれば直ぐ私を追い越すと思う」
物凄く褒められてこそばゆかったけど、心地よいと感じた。
「分かった、弟と妹を守る為にももう少し鍛えて見るよ」
「えぇ、頼りにしてる！」
ルビィさんが花が開いたように笑う。
綺麗だと思った、自然と俺の顔も綻ぶ。
この異世界に巻き込まれてしまった俺達の現状はあまりよくは無いが、それでも新しい出会いに感謝したい。
ーーー

ここの食材は色はまったく違えども味は地球と似てるものが多い。
明日はお金稼ぎに行くために旅人の為の資金安定所という場所があるようでそこに行こうと思っている。
明日も忙しくなりそうだ。

## 第五話　異世界へ（後編）（後書き）

如何でしたでしょうか。
刀の扱いの所は動画などを見ながら一生懸命不自然な動きが無いようにこだわって打ったつもりです。
不自然な部分があればご指摘お願いします。
次回も読んでいただけたら幸いです。

## 第六話　働くもの食うべからず

「はよー！ア・ニ・キ！　」
不謹慎だけど、悪い夢でも見ているのかと思った。
普段常に不機嫌そうな弟は、今日は珍しく機嫌がいい。
「お、おはよ……朝からご機嫌だね、何か良い事でもあったのか？　」
「兄貴～酷いな、それじゃあいつも俺が機嫌が悪いみたいじゃないかーはっはっは」
うん、まあその通りなんだけどな。
つい出そうになった言葉を飲み込んだ。
「聞いてくれよ～なんつうか俺この世界有ってるかも知れねえ……」
「うん？　」
「一から全ての食品を作る事の嬉しさを実感したんだ！　」
「今日は何を作ったの？　」
「食パンとジャムだぜ！！　我ながら力作でよー！　パンなんて粉から……」
ひたすら嬉しそうな顔でしゃべり続ける弟。
うん……生き生きしてるのは分かるんだけど……なんか戻ってきて欲しい。
俺はこれ以上暴走しまくる前に話題を変える事にする。
「ありがとう、朝ごはんが楽しみだな。今日は皆で資金安定所に行こうと思っているんだけど、勇次も来てくれないか？　」
「あぁ……悪りぃ、俺ばっかり楽しみ過ぎた。勿論行くよ」
「楽しむのは問題ない、ご飯おいしいし大歓迎。だけど食代は稼がないとな」
「おう」
「兄達ご飯早く食べようよー！　」
久しぶりのパンだからなのか有希の声が弾んでいる。

食事の力は偉大だな……うんうん。
「兄貴、まずは食べに行こうぜ」
「あいよ、支度したらそっち行くよ」
食費浮かせられるし、弟は大喜びだしミニキッチン付きにして良かったな。
支度してテーブルの上のパンらしき物を見て凄いびっくりした。
以前にも銀じいに教えてもらってたが食材の形と味は殆ど一緒なんだそうだ。
ただ色が違う。
小麦は黄色の穂がなるのではなく桜色のような色をしているそうだ。
当然粉も桜色だったようでパンがほんのりピンクになっていた、味は普通のパンだった。
こう見ると異世界に来た事を実感する。

ーーー

われる為により一層技術を高めようとするという事だ。

俺達もまずは短期の手伝いをやろうと思いやってきたのだ。

まずは経験書というもので大きさは手帳サイズの小さな本の中に自分の経歴などを書き込む。

俺達はまだ能力などが使えるわけではないので守護人というのは伏せて人間として書いた。

経歴は森の向こうにある集落からやってきて世界を見ていく為に旅を続けているとした。

最悪ボロが出そうになっても、そこまで長期滞在は考えていないので身分証明書として作るに留めておこう。

ーーー

「分かりましたー」
「モフモフ」
守護人という役割は忘れてはいない、調べるという事をするにしても今は生活する為にもお金が必要だと思えた。
有難い事に、ルビィさんと銀じいは俺達の成長の為に仕事は手伝わないであえて師として給料を要求してくれた。
これは俺達が他で足を引っ張っていると思わせない為の精一杯の気遣いであろう。
その代わり仕事をやっている間に父の所在、母が守らねばならない原因についてなどを探ってくれている。
俺達には俺達が今出来る事を精一杯やろう。
異世界に行くと言う話しになった時に俺は最悪自分一人でかまわないと思っていた。
正直、戻ってこれるか分からないし、命の保障だって無い。
弟や妹は平穏な人生を過ごして欲しいと。
しかし、実際に異世界に来て見て俺は弟や妹の存在に助けられているところがあるんだ。
普段兄だから長男だからと言って精一杯見栄を張って薄っぺらいプライドを守っている。
こんな卑怯で頼りがいの無い奴は兄貴なんて失格だ。
そんな気持ちが渦巻く。
でも弟の勇次は此処で生きがいを見つけ、有希も以前より明るい。
その前向きな姿勢と一人じゃないという存在がなんというか……自分もがんばって見ようという気持ちにさせてくれている。
あ、俺まだ大丈夫という安心感があった。
今はつかの間の偽りの平穏を自分が強くなって誰かを弟を妹を皆を守れるようになったならば。
きっともっと積極的に進んでいける気がするんだよ。
俺は穏やかな顔をしながら決意を誓ったのだった。

## 第六話　働くもの食うべからず（後書き）

次の話が予想以上に長くなってしまい泣く泣く短めのお話となりました。
次回は新キャラ登場です。

## 第七話　ある女の人生、歪んだ未来（前編）

――所変わり、此処はリーフォレスト最南端にある教会。

教会の孤児が西にあるオシデント国家の領主であるオシデント財閥の娘として引き取られる事になった。

オシデント財閥と言えばここのエリアでは知らぬものがいないほど金持ちで、人間等が使う石使い特有の「精石」や占い師が使う「タロットカード」などを大量生産しているオシデントカンパニーを親会社に持つ。

しかし、大量生産と言っても術師数十人、何百人と囲い精神力を引き出させ術師と大量に使い捨てている。

法的にこの人間地区は人を人として扱い雇い主と雇われ、人との対等な関係で結ばれている。

さまざまな制約があるがこれには抜け道というのがまったく存在しないわけではなかった。

巧妙に法を掻い潜り、犯罪かも知れないが確証が無い、目撃者が無いし雇われた側も皆「喜んで」向かっているし、訴えも着ていないのだ。

その為、無理やり取り締まるわけに行かず「資金安定所」側も、そのまま放置されていた。

それもそのはず雇われ人は一般に攻防人と呼ばれる人ではなく、実態は信仰不明の孤児院専用の教会からの孤児ばかり。

そこから付き添いと称したオシデントカンパニーの社員が孤児を登録し、術師の攻防人として仕立て上げる。

オシデントカンパニーからも同じような時期に依頼を出し、仕立て上げた攻防人を使う。

もしくは本当の攻防人が来たとしても最終的には殺さないように適度に飴を与え、閉じ込めておけばいいだけの話である。

オシデント財閥の財力をもってすれば、いくらでも逃れる方法はあるのだ。
ちなみに孤児の引き取り元である信仰不明の孤児院専用の協会というのも、実はオシデントカンパニーの孫会社でまかなわれている。

――――――――――――――――――――――――――――――――

無論、孤児にはそのような話はまったく知る由も無い。
孤児院専用教会も信仰は不明だが孤児への扱いは良く、地域住民からも評判が良かった。
それもそのはず、徹底的に教育されたオシデントカンパニーの社員が神父役をこなしているのだから……。
今回、引き取られる事になった孤児はアクア・セラエーヌという女で御年（おんとし）２４歳。
茶髪に青い瞳、流れるような髪は時折光の加減でつやつやと光って見える。
オシデント財閥までの旅に耐えられるよう丈夫で、それでいて品のいいコートが彼女の持ち前の清楚さと美しさを際ださせていた。

「では、よろしくお願いします」
「引き取り手が見つかって良かった、オシデント財閥の娘になるなんて幸せだな」
神父らしき人は笑顔で言った、目には少し涙さえも浮かべている。
無論、これは嘘である。
一度身分証明と称して攻防人に仕立て上げられ、術師にされるのだ。
本来、このような事を言えば同じように泣いて名残惜しそうにするか、笑顔でありがとうと言う孤児が多いはずなのに今日の彼女はなぜか浮かない顔だ。
「はい……ありがとう、ございます」

「どうしたのかい？体調でも悪いのかい？　」
神父は彼女に問いかける、心底不思議だという顔で。
しかし、これは研修の末取得された技術に過ぎないのだ。
神父は心配なんて微塵も思っていないのだから。

彼女には両親が居た、それなりに裕福な家庭で幸せに思っていた。
がしかし、幸せは長く続かなかったのだ――。
強盗が遅いあろう事か襲った後に証拠隠滅の為か火を放った。
虫の息だった両親は逃げ遅れ、彼女は強盗に戦利品の一部として連れて行かれる。

強盗のアジトがある洞窟で縛られ、そこで賊の手下に襲われそうになった。
なんと、強盗は屋敷で雇われていた従者達であったのだ。
それを知ったとたん、今までの優しい思い出が全て偽りになってしまい、酷く憎んだ。
素質はあったのだろう。
（私の幸せを……両親を返して！！　憎い……あんたらなんか死んでしまえ……！！　）
戦利品の中に含まれていた精石が光った瞬間、彼女が強盗達を憎しみの炎で従者達を全て焼きつくしてしまっていた。
裸同然の状態でズタボロになって逃げ出し、気を失い倒れたが幸い善良な攻防人達に助けられた。
孤児として教会へと預けられることとなった。
彼女はとても人間が嫌いになる心に囚われていた。
そして、正当防衛と言えどもいとも簡単に何人かの命を一瞬で奪ってしまった自分に絶望した。
ここに預けられた時に妙な違和感がある、何か企んでるんじゃないか。
そう思ってしまうと教会のすべての人間の言動が気になってしま

った。
しっかりと大丈夫だという確認をしてからでは無いと安心が出来なかったのだ。
待遇はとてもいいし、衣食住も約束されている。
その部分には感謝はしているのだ。
彼女は安心した快適な環境だからこそ、怖いと思っていた。
ここは孤児院専用の為かあまり人が居ない、お金はどうしているのだろう。
神父に聞いたりもした、そうすると答えは決まって「子供の事が大好きなおじさんからいつも貰っているんだよ」と笑顔で言うのだ。
しかし、そのおじさんはいつ来るのだろう？
手紙も着た事が無い、たまに財閥に引き取られ私と同じぐらいかそれよりも若い男女がたまに引き取られてくるのだ。
神父さんも出かけている所を見た事がない。

それ以降、神父尾行を密かにしたり、不振な行動が無いか常に警戒していた。
そして神父はついに尻尾を出した。
それは神父が人目をはばかり、精石話をしている時の事だ。
彼女はいつも通り本を読んでいるふりをしながらそっと近づき、ドア越しに耳を傾けた。
「えぇ……ちょうどいい娘がおりますよ、こちらで雇った攻防人に回収させた娘が。精神力反応も高かったようですし今までどおり従業員として使わせますか？」
「あぁ……また以前の従業員が使い物にならなくなりましたか？えぇ……ははは、まぁ仕方ありませんね従者はどうしても使い捨てですから」
彼女は耳を疑った。
（回収させた娘……使い捨て……）
言葉を心の中で反芻させる。

――――――

彼女は心は泣きそうだった。
（どうして……こんな事になったの……？　神様なんて居ないの……？　）
あの神父が言っていた事が本当であれば攻防人を雇い、優秀な人材を探し出し引き入れる事が目的だと悟ってしまったからだ。
そう思った瞬間心が音を立てて壊れた。
必死で悟られないよう、顔上をつくろっては居たはずが顔に出てしまったらしかった。
「どうしたのかい？　体調でも悪いのかい？　」
彼女は必死に切り替え、演技を貫こうと心の中で言い聞かせた。
「いいえ、ご心配をおかけして申し訳ありませんでした。私がこのような幸運に恵まれたのも神父様のお陰です、本当にお世話になりました」
曇り一つない笑顔を浮かべた。
「そうかい？　何かあったらこの攻防人に言うんだよ？　」
「はい」
傍から見るとどう見ても優しい神父と神父に嬉しそうに笑いかける美しい女だった。
「うん、疲れたらいつでもいってください。大切な娘さんに何かあれば旦那様に申し訳ありませんからね」
「ありがとうございます、よろしくお願いします」
女と神父と攻防人がそれぞれ別の思惑を考えていたというのは、誰も想像していなかった。

## 第七話　ある女の人生、歪んだ未来（前編）（後書き）

しばらくシリアスが続きます。

## 第七話　ある女の人生、歪んだ未来（後編）（前書き）

今回の話はひたすらに暗い話になります。
そういったお話がお好きではない方は次回の話の前書きにて簡単なあらすじを書きますので、次回の話が出来次第そちらをご覧ください。

## 第七話　ある女の人生、歪んだ未来（後編）

「ラッドさん、すみませんが少し休みませんか？　」
「大丈夫ですか？　アクアさん」
「えぇ」
攻防人の名前はラッドという。
彼女の名前は既に神父から聞いているのだと話してくれた。
今は彼女が疲れている様なので2人で道端の丸太に座り込んでいる状態である。
「うーん……もう太陽が沈んできましたね、一旦テントを張って休みますか？初めての長旅でアクアさんもお疲れの様ですし」
空を眺めながらラッドは言う。
太陽が沈みはじめ段々と空がオレンジ色になりつつあった。
彼女が疲れるのも無理はない。
教会から出て一日目ではあったが、一回も休まず長い距離をひたすら歩き続けてしまったからだ。
「歩道では夜は危険です。少し草原に移動しましょう」
「あ、分かりました」
サクサクと歩き、道から少し外れた所にちょうど大きめの木の下で地面が平地になっている草原が見つかった。
川が少し離れた所にあり、ちょうどいい。
「すみません……私テントって組み立てた事が無くて……」
「かまいませんよ、アクアさんは俺のバックパックから缶詰をとって開けていただけますか？　」
「はい、わかりました」
彼女は最初テントを張る手伝いを一生懸命やろうと色々と取り出して見たが、組み立てたことが無かったのだろう。
対照的に攻防人のラッドは野宿が日常らしく、慣れた手つきであっという間に組み立てていた。

「出来ました、夕飯にしましょう」
「はい」
夕飯と言っても非常食の缶詰が2つに箱パクという小麦粉で出来た硬い焼き菓子が並んでいるだけ。
特に会話も無くさびしい夕食であった。
「テントの寝場所ですが、仕切りつけておくだけで大丈夫ですか」
女性だから、気を使っているのだろう。
「あぁ、別に私一人地面でも良かったのに……」
ぼんやりと聞こえないぐらいの大きさの声で呟く。
彼女はもうどうなってもいいと思っているのかもしれない。
(どうせ、生きていても、死んでいるのと変わりない……)
彼女は自分でも何がしたいのか、するべき事を見失っている様だった。
幸せだった家族、安らげるはずだった孤児院。
全てが壊れてしまった。
(どうせなら私が死ぬ前に孤児院の大元に痛手を食らわせて八つ当たりが出来ればいい、そう思っていたけど……)
(万一、痛手を食らわせる事が出来ても家族は帰ってこない……)
悲しくて空しい。
(私は何の為に生まれてきたの……)
自然と顔に陰りが見えた。
「大丈夫ですか？顔色が悪いみたいですけど……」
ラッドは心配そうにたずねる。
「あ、すいませんこんな所で考え込んでしまって……」
「歩きなれない道で疲れたでしょう、明日も歩きますから早く寝ましょう」
「そうですね、おやすみなさい」
彼女はラッドのお言葉に甘え、早々に床に着いた。
――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

―――
その日の夜の事――。
見張りをしているラッドの元に黒いローブを深く被った人物が近づいた。
「こんばんは、どう？　寝てる？　」
その人物がフードを脱ぐと中から美しい女が出てきた。
美しい女はとげのような笑みをラッドに浮かべた。
ラッドもそれに答えるかの様に昼間には見せていない色気を含んだような黒い笑みを浮かべる。
「あぁ……良く眠っているよ、心配なら眠らせる術でもかけておけばいいさ」
女はうなずくとアクアに向かって地に響くような声を発し、呪文のようなものを唱える。
「フフッ、これだけしておけば大丈夫ね」
女は確認の為かアクアの頬を思いっきり叩いた。
術は聞いているようでとのった息を繰り返していたが、頬は赤く少しはれているようだった。
「じゃああの子の服と交換しなくてはね」
女はローブを脱ぐと直ぐにアクアの服を脱がした。
変わりに、アクアにローブを被せる。
「クスクス、貴方に罪は無いのだけど……手荒な真似をされては困るからね」
「ハハッローズも悪い女だな。せめて殺さずに置いてあげなよ」
「そうね、さすがに殺すのは可愛そうだわ」
ローズはそう言うとローブを被せたアクアの手足をリングの様なものでくくる。
そしてアクアをそのまま放り投げた。
アクアは歩道付近に転がる。
「上手く誰かに拾って貰えるといいわね」
ローズとラッドは黒い笑みを浮かべながらゆっくりと日が昇る太

陽を背にオシデントカンパニーに向かって歩き出した。

ーーー

取られたからだった。
「神様？　」
「おい、大丈夫か？　」
そこには見た事も無い服装をしたこげ茶の髪に、少し青みがかった黒い瞳をした青年が彼女を抱えていた。

## 第八話　交差する運命（前書き）

前回のあらすじ。
オシデントカンパニーに向かうために、長い歩道を歩くアクア達だったがその旅の途中、アクアは攻防人である「ラッド」とその連れの謎の女「ローズ」が潜入する為の変装対象として襲われてしまう。
身ぐるみをローブ一枚にされ、手足の自由を奪われた彼女は人生に絶望し、次第に己の運命をあきらめてしまっていた。
少しずつ命の灯が消えようとしていた彼女のもとへ、見た事も無い服装をしたこげ茶の髪に、少し青みがかった黒い瞳をした青年が現れたのだった。

# 第八話　交差する運命

一ヶ月前の夜――。
俺達は初めての仕事をやり遂げて緊張していたのか、宿に帰り体を漱ぎ泥のように寝た。
寝ている間、俺の夢にいきなりある人物が浮かび上がった。
女なのか男なのか顔が中世的過ぎて分からない人だ。
髪の毛は黒で肩まであり、瞳が血のように赤い。
一見すると恐ろしかったが、顔の表情を見る限り優しそうな印象を受けた。
「始めまして、私は人の感情の怒り・憎しみを司る精神族で名はアンガと申します」
名前を聞く限り男の人なのだろう。
アンガは貴族がする様な礼をすると俺を真っ直ぐに見つめる。
「怒り・憎しみを司るとはどういう事ですか？」
「はい、人間は精神力を使っている事はご存知ですか？　」
「まぁ、少しは……」
「全ての生物、自然には必ずバランスというものが大事になっております。例えば植物が多すぎても水が不足してしまう、水が多すぎても植物は殆どが腐り育たなくなります。それは力においても同様なのです。力は精神力を使い現象を起こす、しかし力というのは有限です。人の想いによって力は増えていき、現象を及ぼす事によってその力が変換されてその分減る事になります。その為、全ての力ごとに私達選ばれた一部の精神族によって監視されているのです」
「へぇ……神様はそんな所まで気を配らなきゃいけないなんて大変ですね。それで、貴方は一体何故俺の元へ？　」
「それはですね、貴方方守護人様に今回の仕事を手伝って頂きたいのです」
「それは……かまわないと思いますけど……」

俺は自然とそう口にしていた。何故だろう？もしかしたら俺たちを利用しようとする輩かもしれない。その可能性だってあるのに、どうしてもアンガさんがだまそうとしている様には思えなかった。この仕事はうけなくてはならない気がした。

「先に言っておきます。確実に事件に巻き込まれます」

「？」

「神は必ず貴方方に試練を与える事でしょう、守護人というのは精霊の力と神力を使います。神の力とはどれだけ神の試練を耐えられるか、己の力で何を救えるか、どう救えるかで力は強くもなり弱くもなります」

「これは貴方方の為の試練の１つと神はおっしゃっておりました。それに貴方方の力は強すぎる、強すぎるとそれだけ利用されたり、時には誰かが傷つく事も有りましょう」

これは、俺が常々感じていた事だ。

俺達の力は強い。

強いのはすばらしい事だ、しかし強いという事はそれだけコントロールが難しかったり、それが人の目にさらされた時利用しようとする者だって居るかもしれない。

そう思うと地球に居たときの恐怖がよみがえって来るようで、少し背筋がぞわりとした。

「では仕事の内容を説明致します。今回は先ほどお話した世界のバランスが崩れる原因となるある女性を救っていただきたい。彼女は己の人生に絶望し世界に憎しみをいだいている、このままでは彼女が道を大きく謝るか死してその精神を引継ぎ邪悪な存在となってしまうでしょう」

「救う方法は貴方方に任せます、保護するでも、状況によっては殺してしまってもかまいません」

「殺すって……」

ずいぶん物騒な考えだと思った。

「言ったでしょう？これは試練なのです。それに生かす事だけが救

う事とは必ずしも一致しない事を理解していただきたい。勿論、死にたいと望んでいたとしても本当に望んでいるかは貴方方が見極めてください。取り返しのつく場合だっていくらでも有るのですから」
「冗談……ではない、か？　」
その人は俺の質問に答えるように話を続けた。
「そして、この者が奏でる物語が我々によって仕組まれた物語ではない事を信じて欲しい。神が大切に創った全ての命を無駄にするという事は、神への冒頭も等しい。その者が奏でる物語は必ず真実を奏でる事をお約束致します」
その人はそう言い終わると、その人の瞳と同じ赤い宝石を俺に渡した。
「これは？　」
「これは人1人の想いの結晶。精石です」
手で転がして覗く。
その精石を眺めていると、ある女性の姿が一瞬重なって通り過ぎていった。
彼女の青い瞳、光に照らされて輝く髪はこの石の様にキラキラと輝いていた。
「任務を達成したらどうすればいい？」
「現実世界で貴方方にお会いする事となります」
「どうか彼女を救ってあげて下さい。そして、神はいつも貴方方を見守っている事を忘れないで」
「貴方方は神の……」
そのまま俺の意識は遠くなっていった――。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5843w/

守護人たちへ

2011年10月4日10時54分発行